ごめんあそばせ召しませ執事？

りったん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ごめんあそばせ召しませ執事？

【Ｎコード】
Ｎ０４５２Ｘ

【作者名】
りったん

【あらすじ】
有栖川亜梨沙は大富豪のお嬢様で、美少女です。でも恋に臆病な十七歳です。そんな亜梨沙の邸にイケメン執事がやって来ます。その名はトーマス・バトラー。亜梨沙は一目で恋に落ちてしまいます。でもそれをトーマスに言えません。彼女の思いはいつか通じるのでしょうか？　恋愛の神様にもわからないかも知れません。そんな亜梨沙を好きなのについついセクハラしてしまう小次郎、トーマスのイケメンぶりに闘志が湧いて彼を落とそうとする亜梨沙の親友の蘭。その上クラス担任の坂野上麻莉乃先生までトーマスに一目惚れです。

たくさんの人達の恋の弓矢があっちこっちに向いて、混乱必至です。どうしましょう？　新たなる登場人物である保健室の魔女と呼ばれる里見美玲先生が登場。トーマスの神通力が通じません。もしかすると主人公は亜梨沙ではなく、トーマスかも知れないというネタバラシ？　要するにモテ男のお話？　毎週土曜日に更新致します。多分……（汗）。

あ、あなたなんか、別に何とも思っていないんだから！（前書き）

あれれ、亜梨沙は恋に臆病な内気な女の子のはずだったのに……。

申し訳ありません、ツンデレ度がアップしてしまいました（汗）。

あ、あなたなんか、別に何とも思っていないんだから！

「パパはこれから出かけるが、もしかするとパパが戻る前に今度ウチで執事をしてもらう人が来るかも知れないから、その時はよろしく頼むよ」

有栖川龍之介（ありすがわ りゅうのすけ）。日本で五本の指に入る大企業グループの総帥であり、政界をも動かす実力者でもあります。

いつも眉間に皺を寄せている鋭い眼光の持ち主ですが、愛娘の前では完全に人が変わり、親バカ全開になります。身長はそれなりに高いのですが、体重がそれを上回っており、スーツのボタンが弾けそうです。そのため、

「もっと痩せないとパパの事、嫌いになっちゃうぞ」

と言われる毎日です。

「ええーっ、そんなの嫌だあ。面倒臭いよお」

そう言って拗ねてみせる髪型はスウィートボブ、黒目がちの大きな瞳、口角の上がった口、小さい鼻の可愛らしい女の子。有栖川亜梨沙（ありすがわ あ りさ）、高校二年生。このお話の主人公（ヒロイン）です、多分（汗）。

「まあ、その人が来たら、メイド達に応対してもらえばいい。じゃあ、行って来るよ」

龍之介は亜梨沙に頬を突き出します。奇麗に髭を剃った、歳の割にはつやつやした肌です。

亜梨沙が幼い頃からの習慣です。所謂（いわゆる）「行ってらっしゃい」のキスをご所望なのです。

「もう、仕方ないなあ」

亜梨沙は嫌そうな顔をしますが、本当は嫌ではありません。

生まれてまもなく母親に死なれた亜梨沙にとって、龍之介は唯一の肉親だからです。

「行ってらっしゃい、パパ」

亜梨沙は龍之介の頬にキスをしました。

「行って来るよ」

龍之介はニコッとして、玄関の前に横付けされた黒塗りのリムジンに乗り込みます。

「行ってらっしゃいませ」

メイド十人、庭師五人、コック三人、警備員二十人が龍之介を見送ります。

「私も学校に行かなくちゃね」

亜梨沙は玄関の脇にあるウォークインクローゼットに行き、靴を学校指定の黒のローファーに履き替え、同じく学校指定のアップルグリーンの肩掛け鞄を手に持つと、玄関を出ました。

亜梨沙が暮らしている邸は、東京都西世田谷区にあります。

敷地面積は福岡ドーム約三個半分で、二十万?。迷子になりそうな広さです。

邸の周囲は上部に高圧電流が流れる高さ五メートルの防弾壁で覆われており、広大な庭にはドーベルマンが十二頭放たれています。

全ての犬に名前が付けられていて、亜梨沙の命令で動くように躾けられているので安心です。

そんな広大な邸の庭の奇麗に敷き詰められた石畳の上を亜梨沙は元気良く駆けて行きます。

亜梨沙ほどのお嬢様になると、一般的には車で送り迎えが当たり前ですが、亜梨沙はそれをよしとせず、毎日徒歩で通学しています。

「あーん、パパがキスをおねだりするから、遅刻しちゃいそう！」

知らない人が聞いたら、キャバ嬢が常連の客と揉めたのかと思われるような事を言いながら、亜梨沙はようやく邸の門をくぐります。

すぐに人のせいにするのは、亜梨沙の悪い癖です。

邸の前を通っているのは国道２４６号線です。今は通勤時間なので、車の往来が非常に激しくなっています。

門の正面には、有栖川家専用の半感応式の信号と横断歩道がありますが、亜梨沙はそこを渡る必要はありません。彼女は門を出ると

舗道を左に曲がりました。

亜梨沙が通学している天照学園高等部は、亜梨沙の邸から徒歩で十五分程度のところにある幼稚舎から大学までである名門です。

但し、亜梨沙の場合、玄関から門まで全力で走って五分はかかるので、学園に着くには二十分必要です。

「入学以来、無遅刻無欠席だったのに！」

息を切らせ、赤チェックのプリーツスカートをひらめかせながら、亜梨沙は前方に見える礼拝堂のような尖塔が建つ学園を目指しました。

「え？」

急いでいるはずなのに、亜梨沙は通りの反対側の舗道を歩いている黒のスーツを着た金髪の外国人に気がつきました。

（うわあ、すっごいイケメン！）

思わず立ち止まってしまい、そのイケメンが歩いて行くのをジッと見てしまう亜梨沙です。

「いっけない！」

今はそれどころではないのを思い出し、前を見てまた走ります。

（何考えてるのよ、私ってば！）

亜梨沙は走って暑くなったので、着ていたターコイズブルーのブレザーのボタンを外し、ローズピンクのネクタイを緩めました。

「暑いよお」

すでに季節は十月とは言え、まだまだ走れば暑くなるのです。

これだけ必死に走っている亜梨沙ですが、悲しくなるくらい胸は揺れていません。

彼女は小学生もびっくりの「貧乳」なのです。全体的に痩せ細っていて身長は１５５ｃｍと小柄です。

まあ、そのお陰か、走るのは速いようです。

「セーフ！」

亜梨沙は何とか学園の正門が閉ざされる前に校庭に駆け込みました。

正門を閉じる当番の先生が亜梨沙を睨みますが、亜梨沙は気にしません。

その直後に予鈴が鳴ります。しかし、亜梨沙の戦いはまだ終わっていません。

「それ！」

今度は生徒用の玄関に走ります。天照学園高等部は全館土足ですので、上履きに履き替える事はありません。

亜梨沙は玄関の飛び込むと、自分の教室がある二階へ向かって階段を駆け上がります。

多分、後ろからついて行けば、パンチラ大量祭かも知れません。

でも、無遅刻無欠席が懸かっている亜梨沙にはそんな事を気にしている余裕はないのです。

「間に合ったあ！」

亜梨沙は息を切らせて教室に飛び込みました。

激しく脚を動かしたせいで、黒のニーハイソックスがだらしなく膝下まで下りてしまっています。

「間に合ったじゃありません、有栖川さん！」

亜梨沙はギクッとして声がした方を見ました。

教壇に腕組みをしてこちらを睨んでいるマッシュショートヘアでピンクのパンツスーツを着た若い女の先生が立っています。

彼女は亜梨沙のクラスの担任で、英語担当の坂野上麻莉乃（さかのうえ まりの）です。

１６５ｃｍとどちらかというと長身で、隠れ巨乳と男子の間で評判ですが、本人は自分の事を太っていると思っています。

そんなちょっぴり天然なところも人気があるようです。

「あ、麻莉乃先生！」

亜梨沙はつい大声で叫んでしまいました。麻莉乃先生はムッとして、

「今まで無遅刻無欠席だった貴女が、今日はどうしたのですか？」

「いえ、あの……」

まさか、パパにキスをせがまれた上に、通学途中に飛び切りのイケメンがいたので見入ってしまい、遅刻しそうになりましたとは言えません。

「お座りなさい。後でじっくり反省文を書いてもらいます」

麻莉乃先生は厳しい表情で言いますが、少し垂れ気味の目のせいで、迫力に欠けてしまいます。

「はーい」

亜梨沙はションボリして自分の席に着きました。

（パパとあのイケメンのせいだ……）

亜梨沙の逆恨み機能が発動しました。

そして、一時限目の授業が終わり、休み時間です。

「珍しいわね、亜梨沙が遅刻ギリギリなんて」

顔周り・サイド・バックどこから見ても立体的なロングヘアの女子が席を立った亜梨沙に近づいて来て言いました。亜梨沙よりちょっとだけ背が高いです。

彼女の名前は桜小路蘭（さくらこうじらん）。亜梨沙同様大金持ちのお嬢様です。

但し、亜梨沙と違ってこれでもかという巨乳で、シルバーホワイトのブラウスの第一ボタンが弾けそうです。しかもその上隠れ肉食系でもあります。

狙った獲物は絶対逃がさない怪盗ルパン（初代）並みのハンターです。

でも見た目は大人しめで、やや垂れ気味の目はいつも夜空の星のような光を宿してしており、鼻はギリシア彫刻のように高く唇は潤いがあって採れたてのサクランボのようです。

しかも、どこから見てもオットリした雰囲気です。能ある鷹は爪を隠すのです。

亜梨沙がヒラヒラのプリーツスカートなのに対し、蘭はブレザーと同じターコイズブルーのタイトスカートを履いています。

そして、白のニーハイソックスを履いた脚は、亜梨沙の細過ぎて魅力のない脚と違い、男子達の注目の的です。

「まあ、そういう日もあるわよ」

亜梨沙は理由を説明するのが面倒臭かったので、そう言って誤魔化しました。

その亜梨沙の顔が次の瞬間引きつります。

「だあれだ？」

後ろから亜梨沙のない胸を鷲掴み（できたのでしょうか？）した手。

「何するのよ！？」

亜梨沙は電光石火の早業でその手を払い除け、振り向きざまに平手打ちを炸裂させます。

「おうおう、相変わらずいいビンタだねえ、有栖川」

そう言って、叩かれた頬を撫でたのは、亜梨沙より１５ｃｍくらい身長の高い同じクラスの男子生徒である早乙女（さおとめ）小次郎（こじろう）。ソフトモヒカンで、やや出っ歯の愛嬌のある顔をしています。

亜梨沙に殴られて嬉しそうにしているのは、彼が変態だからではなく、亜梨沙の事が好きだからです。

でもそれを言えないガラスのハートの持ち主です。

彼は亜梨沙のビンタを食らって乱れたセルリアンブルーのブレザーの襟を直し、スカイグレーのスラックスを引き上げて、

「これだけ毎日揉んであげてるのに、全然成長しないな、お前の乳」

とその感触を確かめるように指を動かします。

「そんな事、大きなお世話よ、バカ！」

亜梨沙は顔を赤らめ、ムッとして言いました。でも小次郎はニヤッとして、

「今度は違う方法を試してみるよ」

「試すな！」

亜梨沙が言い返した時には、小次郎は教室を出ていました。

「何だかんだ言って、貴方も早乙女君の事、好きなんじゃないの？」

蘭がクスクス笑いながら言います。亜梨沙は蘭を睨みつけて、

「何でそうなるのよ！？　私はあいつの事なんか、小川のドジョウほども関心がないわ」

と言ってツンと顔を背けます。蘭は肩を竦め、

「だったらどうして、毎日胸を揉まれても、先生に言わないのよ？　彼の事が好きだからでしょ？」

「違うわよ！　そこまでしたらあいつが可哀想だから、言わないだけよ！　同情よ、同情！　愛情とは似て非なるものよ！」

亜梨沙は真っ赤な顔で必死になって捲くし立てます。

彼女が小次郎に関心がないのは事実ですが、顔を赤らめているせいで説得力が微塵もありません。

「はいはい」

蘭は呆れたように返事をすると、自分の席に戻ります。

「もう、蘭たら、面白がっちゃって……」

亜梨沙はプリプリしたまま席に着きました。

その頃、男子トイレの個室に籠もって項垂れている小次郎。

大きい方をしている訳ではなく、反省中です。

（またやっちまった……）

彼は、亜梨沙の気を引きたくて、彼女をかまっているのですが、今の方法では確実に嫌われていくだけだとわかっています。

でも、亜梨沙に素直に自分の気持ちを打ち明けられない絵に描いたような小心者の小次郎は、セクハラ紛い（いや、セクハラそのもの？）の事しかできないのです。

「お前って、本当にバカだよな」

その個室の前で、長身で肉体派の男子生徒が言いました。小次郎

より更に１０ｃｍほど大きいです。

彼の名前は、高司譲児（たかつかさじょうじ）。日本とアメリカのハーフです。本当はブロンドヘアなのに、何故か黒く染め、きっちり七三に分けた上、黒縁眼鏡をかけているちょっと変わった男子です。

「ああ。本当にバカ……」

ますます項垂れる小次郎です。

「まあ、俺もバカだけどね」

そう言って苦笑いする譲児は蘭の事が好きで、毎日欠かす事なくアタックをし続けていますが、全く相手にされていません。

二人は少し基本（ベース）が違うバカのようです。

小次郎は告白して振られるのが怖いバカ、譲児は振られても全く堪（こた）えないバカ。

この二人はいつかバカの決着をつける時が来るでしょう、多分。

お昼休みになりました。

亜梨沙は四階建ての学食で手早く昼食をすませ、麻莉乃先生に言われた反省文を原稿用紙三枚に書き、職員室に持って行きました。

天照学園は校則は厳しくありませんが、生徒会が自主的に決めた

規則があり、亜梨沙はその第六十七条の「登校時における精神的余裕の確保」に抵触したので、反省文を書く羽目になったのです。

（訳わかんないわ、その規則……）

亜梨沙は溜息を吐きました。反省文を書かされた揚げ句、職員室で麻莉乃先生にお説教されたのです。

「私は、有栖川さんが憎くて言っているのではないのですよ」

麻莉乃先生は目をウルウルさせてお説教しました。それを横目で見ている男の先生の顔が赤いのは決して熱があるせいではないでしょう。

「私の父が、厳しく指導してくれって言ったからですよね」

亜梨沙はそう言いたかったのですが、グッと堪えました。そんな事を言えば、火に油どころか、〇ちゃんねるに燃料投下くらい危うい事になるからです。

「はい。すみません」

亜梨沙は反省しているフリをして肩を落としてみせました。

いくら演技でも、反省する理由がよくわからないので、亜梨沙はドッと疲れました。

しばらくして、ようやく麻莉乃先生のお説教から解放された亜梨

沙は教室に戻るために廊下を歩いていました。

「あれ？」

美術室のドアが少しだけ開いています。

まだお昼休みですが（天照学園高等部のお昼休みは一時間半です）、気の早い生徒が来ているのでしょうか？

何気なく中を覗いた亜梨沙は心臓が止まりそうになりました。

「う、うん、うう」

三年生の男女が美術品の横で激しくキスしていたのです。

舌を絡ませ、唇を貪(むさぼ)るように吸い合っています。クチュクチュと淫靡(いんび)な音が聞こえます。

何故三年生とわかったかと言いますと、女子はネクタイの色が学年ごとに違うのです。

三年生はマンダリンオレンジ、二年生はローズピンク、一年生はルビーレッドなのです。

対する男子は、ネクタイは全学年同じですが、スラックスのベルトのバックルが違います。

三年生は金、二年生は銀、一年生は銅なのです。

「ぷはあ」

長いキスだったらしく、男子生徒は水中から顔を出したかのように口を開き、息を吸い込みました。

「うふん」

女子生徒の方はトロンとした瞳で男子生徒を見つめています。

二人の間には、涎(よだれ)が窓からの光に照らされて、白い糸のように光っています。

（うわあ……）

亜梨沙は自分がキスをしたような感覚に陥り、全身が熱くなりました。

その時、ふと彼女は朝見かけたイケメンの外国人を思い出します。

（な、何考えてるのよ、私は！？）

亜梨沙は自分と彼とのキスのイメージを頭から追い出し、廊下を走りました。

「どうしたの、亜梨沙？　顔が赤いわよ。熱でもあるの？」

教室に戻ってもさっきの衝撃を忘れられない亜梨沙は顔を火照らせたままだったので、早速蘭に突っ込まれました。

「ね、ね、熱なんかないわよ！」

亜梨沙は呂律が回らないほど動揺した状態で席に着きました。

「何があったんだろう？」

それを自分の席からこっそり観察していた小次郎が、隣の席の譲児に尋ねます。

「気になるなら、自分で訊けば？」

譲児は冷たく言い放ちました。項垂れる小次郎です。

「それができれば苦労しねえよ……」

亜梨沙の胸は揉めるのに、そんな事も訊けない小次郎は正真正銘のバカです。

（が、学校の中でキスなんて、校則違反だよ……）

忘れようとすればするほど、さっきのシーンが頭の中を占領して来る亜梨沙です。

ちなみに亜梨沙はキス未体験です。あのキスは未体験の亜梨沙には刺激が強過ぎたかも知れません。

「なるほど。そういう事ね」

蘭が愉快そうに亜梨沙の顔を覗き込みました。

「な、何？」

亜梨沙はビクッとして蘭を見ます。蘭はクスッと笑い、

「貴女、職員室からの帰りに美術室を覗いたでしょ？」

と見事な推理を展開します。

「み、見てたの、蘭？」

亜梨沙は声を落として尋ね返します。蘭は腕組みをして、

「違うわよ。有名なのよね、美術室のそれ」

「え？」

亜梨沙はまた顔が真っ赤です。鮮明に思い出してしまっています。

「美術の先生がよく鍵を閉め忘れるのを知っていて、お昼休みや放課後に忍び込むカップルが多いそうよ」

蘭は楽しそうに話します。

「でも、その、あの、えーと、あれって、校則違反よ」

目が完全に泳いでいる亜梨沙です。蘭は亜梨沙をジッと見て、

「野暮な事言わないの、亜梨沙。愛は時と場所を選んでいては成り立たないの」

「ええ！？」

キス未体験の亜梨沙にはすでに理解不能の世界に突入のようです。

「あれ？　ひょっとして亜梨沙、キスした事ないの？」

蘭が目を見開いて言いました。亜梨沙はまた顔を紅潮させて、

「な、ないわよ！　悪い？」

と蘭を睨みます。

「ないのか」

聞き耳を立てていた小次郎が呟きます。

「良かったな、小次郎」

その肩を優しく叩く譲児です。

「良かったんだかどうか微妙……」

小次郎はまた項垂れます。傷つきやすいお年頃なのです。

（俺もまだだし……）

小次郎は亜梨沙の可愛い唇をジッと見てしまいます。

「何よ、早乙女君？」

亜梨沙がその視線に気づいて小次郎を睨みます。小次郎は引きつりながらもニヤリとして、

「キスもまだなのかよ、さすが貧乳王女だな」

またそんな事を言ってしまい、心の中で血の涙を流す小次郎です。

「うるさいわね！　キスと貧乳は関係ないでしょ！？」

亜梨沙は立ち上がって怒ります。

「まあまあ、亜梨沙」

蘭が彼女を宥(なだ)めました。亜梨沙はプイと小次郎から顔を背けて椅子に座りました。

「お前のバカ、もう止め処(ど)ないな」

さすがの譲児も呆れていました。

「ああ」

小次郎は心の中ではすでに失血死しそうなほど血の涙が出ていました。

するとそこへクラスの最終兵器とあだ名される女子生徒が現れました。

「あれれ、亜梨沙ちゃんと小次郎君は付き合ってるのにキスもした事ないの？」

「な、何言ってるのよ、彩乃(あやの)は！　私はあんな奴と付き合ってなん

かいないわよ！」

亜梨沙がその女子に猛烈な勢いで抗議します。

「あれえ、そうなんだっけ？」

その女子の名は、桃之木彩乃（ももののき　あやの）。ユルフワのボブ、大きな瞳は常にウルウル気味で、多くの男子を勘違いさせますが、本人は全く同級生には興味なし。ジョニデ命です。身長は亜梨沙とほぼ同じくらいです。でも、胸は大きいみたいです。

彼女の脳内では、亜梨沙と小次郎は付き合っていて蘭は譲児にメロメロだと確定しているらしいです。

とんでもなく迷惑な天然娘です。

「……」

彩乃の「亜梨沙ちゃんと付き合っているのにキスもした事ないの」発言で、小次郎は気絶してしまいました。

「しっかりしろ、小次郎！」

譲児が慌てて支えます。

「何ふざけてるのよ、あいつら？」

事情を知らない亜梨沙が、無情の一言を言い放ちました。

気絶中の小次郎に聞こえなかったのは、不幸中の幸いでしょうか？

そして。

いろいろとあった一日も終わり、下校時間です。

「いいなあ、亜梨沙ちゃんは家が近くて」

彩乃が門のところまで来た時に言います。

「近いせいで、遅刻しそうになっただけでお説教されたよ。あまりいい事ないんだよ」

亜梨沙はうんざり顔で言います。また麻莉乃先生のお説教を思い出したようです。

「そう言えば」

彩乃が周囲を見回して、

「小次郎君とは一緒に帰っていないの、亜梨沙ちゃん？」

とまたしても天然爆弾の無差別攻撃です。

「だから、何度言えばわかってくれるの、彩乃！　私とあいつは付き合ってなんかいないの！」

亜梨沙は涙目で訴えます。しかし彩乃は、

「ああ、ごめんごめん。付き合ってるの、内緒にしてるのね」
とドンドン暴走です。
「何とかしてよ、この子……」
亜梨沙は蘭に泣きつきます。蘭は肩を竦めて、
「無駄よ、亜梨沙。彩乃は自分の世界でいろいろな関係を構築しちゃってるんだから」
と彩乃を見ました。すると彩乃は蘭の視線に気づき、
「そう言えば、蘭ちゃんも譲児君と帰らないの？」
と尋ねました。
「ほらね」
蘭が亜梨沙を見てまた肩を竦めます。亜梨沙は溜息を吐いて、
「スルーしかないのか、彩乃爆弾は……」
と言いました。
「じゃあねえ、スイートハニー」
そんなところに、絶妙なタイミングで現れる小次郎と譲児のバカコンビです。

譲児は無視する蘭をものともせず、投げキスをして立ち去ります。

小次郎は彩乃の「付き合ってるのに」の話を思い出してしまったのか、いつものセクハラ攻撃をせずに亜梨沙から離れて行きます。

「あれれ、何だ、喧嘩でもしたの、二人共？」

更に爆弾を投下して来る彩乃を無視して、亜梨沙と蘭は歩き出しました。

「ああん、置いてかないでよ、もう」

目をウルウルさせながら、彩乃は亜梨沙と蘭を追いかけました。

「心臓に悪いな、桃之木の発言は」

小次郎は胸を押さえてフラフラしながら歩いています。

「可愛いんだけど、ジョニデ大好きだから、太刀打ちできないんだよねえ」

譲児は一度彩乃を狙った事がありましたが、見事に撃沈しました。

「お前、誰でもいいのかよ？」

小次郎は軽蔑の眼差しで譲児を見ました。

「そんな事ないさ。今は蘭ちゃん一筋だよ」

譲児はウィンクをして応じました。

亜梨沙は、蘭達と邸の正門の前で別れました。

「あれ？」

庭の方に目を向けると、朝見かけたイケメン外国人がメイドと庭を歩いています。

心なしか、メイドの顔が火照っているように見えます。

「何であの人がいるの？」

ドキドキして思わず立ち止まってしまう亜梨沙です。

彼はメイドに何か説明されながら、庭を見ているようです。

「もしかして……」

亜梨沙は、その外国人が父龍之介の言った執事なのではと思いました。

（でも、執事って、普通おじさんかおじいさんよね）

亜梨沙の家には以前も執事が何人かいた事がありますが、全員老人でした。

「まさかね」

亜梨沙は膨らみかけた妄想を振り払い、また庭を歩き出しました。

すると、そのイケメン外国人が亜梨沙に気づき、メイドに何か言うと近づいて来ました。

「え？」

それに気づいた亜梨沙は、何故か早足になり、玄関を目指します。

（やだ、何で私、急いでるのよ？）

自分で自分がわからない亜梨沙です。

「失礼ですが、亜梨沙お嬢様ですか？」

イケメンは声も素敵です。しかも、流暢な日本語です。

「は、はい」

名前を呼ばれたのにそのまま進む訳にもいかず、亜梨沙は立ち止まってイケメンを見ます。

イケメンは眩しいほどの笑みを浮かべ、亜梨沙にお辞儀をすると、

「私は、本日からこちらのお邸で執事をさせていただきます、トーマス・バトラーと申します。よろしくお願い致します」

と挨拶をしました。

亜梨沙はトーマスのあまりにも優雅な立ち居振る舞いにポオッとなってしまい、反応できません。

顔は熟れたトマトより赤くなっています。

「亜梨沙様？」

トーマスは亜梨沙が瞬きもせずに自分を見ているので不思議に思い、声をかけました。

「は！」

トーマスが心配そうに自分を見ている事に気づいた亜梨沙は、

「あ、貴方なんか、別に何とも思っていないんだから！」

と意味不明な事を言うと、ダッと駆け出しました。

「申し訳ありません、亜梨沙様」

トーマスはもう一度優雅に頭を下げました。

亜梨沙は自分の言動を恥じながら邸に駆け込みました。

（私ったら、何て事を言ったのよ！？）

消えてなくなりたいくらい恥ずかしいと思う亜梨沙でした。

あ、あなたなんか、別に何とも思っていないんだから！（後書き）

お読みいただき、感謝致します。

送ってもらったからって、あなたに恋した訳じゃないんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ　ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

「では、行って来る」

龍之介はいつものように会社に出勤です。

メイド十人、庭師五人、コック三人、警備員二十人が龍之介を見送ります。

そして今日からはそれに加えて、トーマスも見送ります。

「亜梨沙はどうした？」

龍之介は姿が見えない愛娘の事をメイド達に尋ねます。

「お嬢様は本日お身体の調子が優れないと仰いまして」

メイドの一人が言いにくそうに話します。

「朝食でトーストを五枚も平らげて、牛乳を二リットル飲んだのに、調子が悪いのか？」

それはむしろ食べ過ぎです。龍之介は、また亜梨沙の仮病が始まったと思いました。

「仕方のない奴だな」

彼は亜梨沙の行ってらっしゃいのキスが欲しかったのですが、

「今日は早朝会議の日だ。時間がない。行って来る」

と言うと、寂しそうにリムジンに乗り込み、邸を出発しました。

「行ってらっしゃいませ」

トーマス達は声を揃えて言いました。

「お嬢様は本当はどうされているのですか？」

トーマスは龍之介の見送りをすませると、メイドの一人に訊きました。

「多分、お部屋です。何か嫌な事があったのか、出てらっしゃらないのです」

メイドはポオッとしながらトーマスに答えます。すでに初日でメ

イド十人全員がトーマスに惚れてしまいました。

でもトーマスはそれがわかっていません。

「そうなのですか」

トーマスは心配そうな顔で応じ、亜梨沙の部屋に向かいました。

その頃亜梨沙は自分の部屋でベッドに突っ伏して、

「あああ、死にたいィッ！」

と叫んでいました。

彼女は今朝、朝食をすませてから久しぶりに来たあれを感じ、自分専用のバスルームへと走りました。

もちろん朝シャンではなく、お通じの方です。

牛乳二リットルが効いたのか（そんなに早く効きませんね）、快便でした。

「すっきりしたあ！　三日ぶり！」

亜梨沙は鼻歌交じりにお腹をポンと叩いて大声で言いました。

その時でした。

「おはようございます、亜梨沙お嬢様」

廊下の先にいるトーマスが、亜梨沙に気づいて挨拶したのです。

「あああ……」

顔から溶岩が噴き出しそうなくらい赤くなった亜梨沙は、そのまま自分の部屋に走って行ってしまいました。

トーマスは、実は亜梨沙の独り言を聞いてはいないのですが、亜梨沙はトーマスに聞かれたと思ってしまったのです。

（ううう……。昨日に引き続いて、私ってば……）

泣きそうになる亜梨沙です。

（バトラーさんに聞かれたわ……。死にたい……）

亜梨沙はとても学校に行く気になれません。

その時、部屋のドアがノックされました。

「誰？」

亜梨沙は、

（きっとパパがメイドに言って呼びに来させたんだわ、行ってらっしゃいのキスをしに来いって）

と思いましたが、

「トーマスです。お嬢様、お加減は如何ですか？」

「ひいい！」

亜梨沙はまさかトーマスが来るとは夢にも思わなかったので、思わず顔を引きつらせて叫んでしまいました。

「お嬢様、どうなさいましたか？」

トーマスの声が更に尋ねます。

「な、何でもないわよ。何の用ですか、バトラーさん？」

亜梨沙はベッドから起き上がって尋ねました。

「お嬢様のお加減が悪いと聞きまして、お伺い致しました」

トーマスの声にウットリ聞き惚れてしまう亜梨沙です。

（何て素敵な声なの……）

そして、ハッと我に返ります。

（でも、聞かれたのよ、今朝……。私の恥ずかしい言葉を……）

本当は、トーマスを部屋に入れて、もっと近くであの美しいと形容するしかない顔を眺め、まるで天文学的数字で取引されるバイオリンのような高貴な声を聞きたいのです。

「わ、私を笑いに来たんでしょ、バトラーさんは？」

意味不明の切り出し方をし、墓穴を掘る亜梨沙です。それもかなり深いです。

「お嬢様を笑うなど、あり得ません。失礼があったのでしたら、お詫び致します」

トーマスの受け答えはあくまで優雅で気品に溢れています。

（どうしよう？　どうすればいいの、私？）

まるで冬ごもり前の熊のように部屋の中をノソノソと歩き回る亜梨沙です。

「いえ、そんな事はないです。どうぞお仕事にお戻りください、バトラーさん」

亜梨沙はようやくそれだけ言いました。

「かしこまりました、お嬢様」

トーマスが立ち去ってくれるので亜梨沙はホッとしてベッドに腰を下ろします。

「お嬢様」

トーマスはまだいました。亜梨沙はビクッとして、

「は、はい」

「私の事は、トーマス、あるいはトムとお呼びください」

トーマスの声が言いました。亜梨沙は顔を茹で上がったトマトのように赤くして、

（ファ、ファーストネームを呼ぶの！？　それって、もっとドキドキしてしまうわ！）

男女が名前で呼び合うのは家族か恋人同士だと思いこんでいる旧石器時代並みの発想の亜梨沙です。

「失礼致します」

トーマスは亜梨沙の答えを待たずに今度こそ立ち去ったようです。

（トム。亜梨沙……）

ベッドの上で相合傘を描いてしまう年齢不詳疑惑が浮上しそうな亜梨沙です。

（あんなに素敵な人が、私の事を笑いに来るはずないし、そんな事を考えるはずないわ）

結構ポジティブシンキングの亜梨沙です。もう立ち直りました。

「ああ！」

そして、学校に遅れそうなのを思い出します。

鞄の中身を確認し、服装をチェックし、部屋を飛び出します。

「また麻莉乃（まりの）先生のお説教を聞くのはごめんよ！」

亜梨沙はパンチラをものともせず、廊下を走ります。

「お嬢様、どうされましたか？」

またしても廊下の先に立っているトーマスです。

「ひいい！」

亜梨沙は思わずヒラヒラしていた赤チェックのプリーツスカートの裾を押さえます。

「学校に遅刻しそうなの」

亜梨沙はトーマスの顔がまともに見られず、俯いて答えました。

「かしこまりました、ではお車の用意を致します」

トーマスは優雅にクルッと背を向けると、廊下を歩いて行きます。

「ええ？」

亜梨沙は仰天しましたが、すでにトーマスの姿は見えません。

「歩いていたはずなのに、どうしてそんなに早く動けるの？」

亜梨沙は首を傾げましたが、

「ああ、遅刻はできないわ！」

とまたスカートをヒラヒラさせて玄関を飛び出しました。

「お嬢様、お乗りください、お送り致します」

するとすでに、玄関の車寄せに亜梨沙専用の白のリムジンが乗り付けられ、後部のドアを開いて待つトーマスがいます。

「さ、お早く。お時間がありませんので」

トーマスがスッと亜梨沙の右手を取り、リムジンの中に誘導してくれました。

「……」

亜梨沙はポオッとしてトーマスに触られた右手を見つめました。

「お嬢様、着きました」

トーマスの声で我に返る亜梨沙です。

ふと見ると、ドアが開かれ、トーマスが微笑んで立っています。

その向こうにはいつもの学園の佇まいが見えました。

そして、親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）が、トーマスを見て口をみっともないほど大きく開いているのも見えます。その周りにも、トーマスに魅入られたかのような顔の女子生徒達がたくさんいました。

「お足元にお気をつけください」

またしてもトーマスに右手を握られてしまい、ポオッとしてしまう亜梨沙です。

「行ってらっしゃいませ」

トーマスはポオッとしたまま歩き出す亜梨沙に言うと、リムジンを走らせ、邸に帰って行きました。

「亜梨沙、亜梨沙！」

ようやく自分を取り戻した蘭が、まだ宇宙を彷徨（さまよ）っているような状態の亜梨沙に声をかけます。

「何？」

ポオッとした目で蘭を見る亜梨沙です。蘭はすでに戦闘態勢に入った狼の目になっています。

「さっきの殿方、どちら様？　亜梨沙にはお母様が違うお兄様とかいらっしゃらないわよね？」

蘭が質問しますが、まだ大気圏外の亜梨沙には、蘭の言葉は火星人の言葉より理解できません。

「ねえ、亜梨沙ったら」

蘭の執念は岩どころか地球を貫く凄まじさです。

「誰の事？」

少しずつその地球に帰還し始めた亜梨沙が蘭を見ます。

「貴女を車で送って来た方よ。どなたなの？　とっても素敵な方ね」

蘭の後ろには、その答えを聞きたい数十人の女子達がいます。

「ウ、ウチの執事よ。た、大した事ないわ、あんな人」

蘭にトーマスを好きだと悟られたくない亜梨沙は心にもない事を言ってしまいました。

（うわああ、ごおめんなさああい、トムゥッ！）

心の中で絶叫する亜梨沙です。血の涙が出そうです。

「貴女の邸の執事なの。フーン」

悪い魔女のような顔をする蘭です。何を企んでいるのでしょうか？

「有栖川さんのお邸の執事さんなのね……」

遠くから二人のやり取りを見ていたのは坂野上麻莉乃（さかのうえ まりの）先生でした。

彼女の目も、恋する乙女の目です。

送ってもらったからって、あなたに恋した訳じゃないんだから！（後書き）

ここまでお読みくださり、ありがとうございます。

十二神将が懐いたからって、私は懐かないんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ　ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそこそこ美少女です。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

あれこれあって、学校に遅刻しそうになった亜梨沙でしたが、トーマスが車を用意してくれ、無事時間内に学校に着きました。

遅刻はせずにすんだ亜梨沙でしたが、トーマスを見てしまった親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）と亜梨沙のクラス担任の坂野上麻莉乃（さかのうえ　まりの）先生がトーマスに狙いを定めたようです。

しかし、トーマスに握られた右手の事でいっぱいいっぱいの亜梨沙には、そんなライバル達の出現に気づく余裕はありませんでした。

「おっはよう、有栖川！」

クラスメートの早乙女小次郎が、無防備な亜梨沙のお尻をヒラヒラしている赤チェックのプリーツスカートの上からムンズと掴み、

「何だ、ケツも貧相だな、お前」

と言い放ちました。

「何するのよ！？」

亜梨沙は振り向きざまに真空状態を作り出しそうな鋭いビンタを放ちます。

「ぶへえ！」

ソフトモヒカンの髪を揺らして出っ歯の間から涎を飛ばしながら、そのまま数メートル吹っ飛んで校庭に倒れる小次郎です。クルクル回ったために、首にローズレッドのネクタイが巻きついています。

（しまった、折角トムが握ってくれた右手で、あんな奴を叩いちゃった！）

猛烈に後悔する亜梨沙です。

周囲にいる女子達が亜梨沙のビンタに仰天し、男子達は羨ましそうに痙攣している小次郎を見ます。

実は、亜梨沙は気づいていないのですが、彼女は男子に結構人気があるのです。

（早乙女マジ羨ましい。俺も有栖川と付き合いてえ）

そう思っている男子達ですが、

「相変わらず仲がいいのね、亜梨沙ちゃんと小次郎君」

超弩級の天然女子である桃之木彩乃（ももののき　あやの）の無責任な発言のせいで、皆諦めムードです。

「彩乃、どこをどう見ると、私と早乙女君が仲が良く見えるのよ！？」

亜梨沙は彩乃の途方もない解釈にムッとして詰め寄りました。

「どこからどう見ても、付き合っているとしか思えないわよ。ね？」

彩乃はニコッとして周囲の男子達を見渡します。

男子達はコメツキバッタのように素早く規則正しく頷きます。

「訳わかんない」

亜梨沙はプイと顔を背けて歩き出します。

「ええ？　どうして怒るのよお、亜梨沙ちゃーん」

彩乃はそのウルウルした目を見開き、亜梨沙を追いかけます。

「全く、問題児ね、二人共」

蘭は肩を竦めて二人を追いかけます。

「お前のバカもそこまで来たか、小次郎」

本当はブロンドヘアなのに、何故か黒く染め、きっちり七三に分けた上、黒縁眼鏡をかけているちょっと変わった男子である高司譲(たかつかさじょう)児(じ)が呆れ顔で言いました。

「ああ」

心の中で血の涙を洪水のように流しながら、小次郎は青空を見ました。

亜梨沙は遂に小次郎の度重なるセクハラに我慢ができなくなり、隠れ巨乳の呼び声が高い麻莉乃先生のところに行きました。

亜梨沙は小次郎のセクハラがどれほど酷いものなのか、切々と訴え、厳罰を求めました。

「あら、私は有栖川さんと早乙女君がじゃれ合っているのだと思っていましたよ」

今日もピンク系のパンツスーツの麻莉乃先生は、亜梨沙がトーマスに気があるのを一瞬で見抜いていました。ですから、小次郎とくっ付ける作戦に出たのです。

(有栖川さんなんて、私に比べれば魅力に乏しいけど、油断大敵よ)

トーマスと長時間接触できる亜梨沙は強敵だと判断した麻莉乃先

生です。

自分のクラスの生徒を恋敵に想定する麻莉乃先生はお茶目です。

（敵は各個に撃破せよ。当たり前の戦略ね）

麻莉乃先生は見かけによらず「魔女」のようです。

（何としても、二十代で結婚するのよ！）

今年で二十九歳の彼女はかなり切実でした。

「そんなあ。先生、早乙女君はですね……」

亜梨沙は麻莉乃先生に気持ちが通じていないと思い、更に話をしようとしました。

「有栖川さんの思いはわかりました。私から早乙女君に注意します」

麻莉乃先生は亜梨沙の言葉を遮りました。そして、

「女の子にはもっと優しくするようにね」

と言うと、亜梨沙に見えないようにニヤリとします。魔女です、魔女確定です、麻莉乃先生。

「よろしくお願いします」

亜梨沙は一抹の不安を感じながらも、職員室を出て行きました。

そして下校時です。

亜梨沙はいつにも増して小次郎に敵意を剥き出しにし、半径一メートル以内に小次郎が近づくと、

「ガルルル……」

と猛犬のような唸り声を発して威嚇しました。

そのせいか、小次郎は亜梨沙に近づきませんでした。

「やっと理解したか、あのバカ」

亜梨沙は自分を見ている小次郎になおも威嚇をしながら、校舎を出ました。

「ごめんね、亜梨沙ちゃん。私が余計な事を言ったせいで」

彩乃が涙ぐんで亜梨沙に謝りました。亜梨沙は苦笑いして、

「いいよ、もう。今度から気をつけてくれれば」

「ありがとう、亜梨沙ちゃん。もう二人が付き合ってるって事みんなに言ったりしないから、早く仲直りしてね」

彩乃は全然理解していませんでした。項垂れる亜梨沙です。

「仕方ないよ、亜梨沙。それが彩乃ワールドなんだから」

蘭が亜梨沙の肩を叩いて言いました。

「うん」

亜梨沙は顔を上げて蘭を見ました。蘭は何故か薔薇(ばら)の花束を抱えています。

「何、それ？」

亜梨沙は思わず訊いてしまいました。蘭は肩を竦めて、

「ああ、これ？　いつものように、高司君がくれたの。『君は薔薇より美しい』ってメッセージカード付きでね。いつの時代の口説き文句なんだか」

「そうなんだ。蘭も大変だね」

亜梨沙はふとセクハラ魔神の小次郎の隣にいる譲児を見ました。譲児は蘭に手を振っています。

「一回くらい、デートしてあげたら、蘭？」

亜梨沙は小次郎と違ってセクハラはしないジェントルマンの譲児を気の毒に思って提案しました。

「冗談じゃないわ。私は同年代のバカ男子には興味ないの」

蘭はスタスタと歩き出します。亜梨沙は彩乃と顔を見合わせてから、蘭を追いかけました。

「蘭ちゃん、ジョニデはダメよ。これ以上ライバル増えて欲しくないから」

慌てて妙な心配をする「ジョニデ命」の彩乃です。すると蘭はニコッとして、

「安心して、私はそこまで妄想家じゃないから」

「え？」

キョトンとする彩乃です。亜梨沙は苦笑いしました。

（蘭は超現実主義者だからね）

亜梨沙達はそのままお喋りしながら、舗道を歩きました。

そして、亜梨沙の邸の前に到着です。

「今日は亜梨沙のお家（うち）にお邪魔しちゃおうかな」

蘭が突然そんな事をニヤリとして言ったので、亜梨沙はギクッとしました。

（蘭てば、まさか本気でトムを……）

血の気が引く亜梨沙です。

蘭の狙った男子捕獲率は百パーセント。非常に緊急事態です。トーマスの身が危ないかも知れません。

「彩乃はどうする？」

亜梨沙は弾除けくらいにはなるかも知れないと思い、彩乃を誘います。

「ごめんね、亜梨沙ちゃん。今日はＷＯＷＯＷでジョニデ祭なの。家に帰って観ないといけないの」

彩乃は申し訳なさそうに言いました。絶体絶命に一歩前進の亜梨沙です。

彩乃は何度も謝りながら去って行きました。

それに反して、ハンター蘭はニコニコしながらついて来ます。

（どうしよう？）

思案に暮れる亜梨沙を無視するかのように、

「お帰りなさいませ、お嬢様」

トーマスが現れてしまいました。

「あ、亜梨沙、また来るわね」

何故か蘭は顔を引きつらせてそう言うと、お金持ちのお嬢様とは思えない猛烈なスピードで駆け去りました。

「どうしたのかしら、蘭は？」

訳がわからない亜梨沙ですが、取り敢えず蘭が帰ってくれてホッとします。

「お友達の方はどうされたのですか？」

トーマスが近づいて来て尋ねます。亜梨沙はそこでようやくトーマスを見ました。

「え？」

トーマスはドーベルマン十二頭と共に庭から現れました。

蘭が逃走した理由がわかりました。彼女は犬が苦手なのです。小さな犬でも死ぬほど怖がります。

亜梨沙はトーマスとドーベルマン達を見て驚愕します。

（えええ！？　どうしてトムは大丈夫なの！？）

通称「十二神将」と呼ばれているドーベルマン達は、亜梨沙以外が近づくと攻撃するはずなのですが、何故か皆、尻尾を千切れんばかりに振って大喜びしています。

「お嬢様がお帰りなのをこの子達が教えてくれました」

トーマスは眩しいほどの白い歯を見せて微笑みます。

（ああ、もうどうにでもしてえ……）

亜梨沙はその笑顔に卒倒寸前です。そしてはたと気づきます。

（まさかとは思うけど、この子達、みんな女の子だったわね……）

人間の女性ばかりでなく、犬の雌までも虜にしてしまうらしいトーマスです。

「じゅ、十二神将が懐いたからって、わ、私は懐かないんだから！」

恥ずかしさからまた意味不明の事を言い、トーマスから駆け去る亜梨沙です。恋愛初心者過ぎます。

「申し訳ありません、お嬢様」

トーマスは優雅に頭を下げました。

ドーベルマン達がそれを見て卒倒してしまいました。

恐るべし、トーマス・バトラーです。

十二神将が懐いたからって、私は懐かないんだから！（後書き）

あまり進展しないにもかかわらず、お読みいただきありがとうございます。

あなたが見てるからパパにキスできないんじゃないんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそこそこ美少女です。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

「では、行って来る」

龍之介はいつものように会社に出勤です。

メイド十人、庭師五人、コック三人、警備員二十人が龍之介を見送ります。

そしてトーマスも見送ります。メイド達は龍之介に顔だけ向けてトーマスに目を向けています。

皆、トーマスの虜です。

何故か一人、警備員も熱い視線をトーマスに送っています。もしかするとそちらの方かも知れません。

「亜梨沙」

龍之介はいつものように亜梨沙に向かって頬を突き出します。

行ってらっしゃいのキスの要求です。

「もう、仕方ないなあ」

亜梨沙は本当は嫌ではないのに、苦笑いしながら父に近づきます。

（は！）

その時、亜梨沙は今までと違う状況なのを思い出します。

（トムが見てる……）

トーマスの視線を意識したので、途端に顔が茹でたトマトのように赤くなります。

「どうした、亜梨沙？　熱でもあるのか？」

龍之介は心配そうに亜梨沙を見ました。

「か、風邪引いちゃったみたいだから、キスはお預けね、パパ。うつったら困るでしょ？」

亜梨沙はこれ幸いと父から離れました。

「亜梨沙の風邪なら、パパは喜んでうつしてもらうよ」

龍之介はニコッとしてちょっとだけキモい事を言いました。

メイド達がビクッとします。

コック達と警備員達は苦笑いです。

「だ、ダメよ、パパ！　会社の人にうつるでしょ！　だからお預け！」

亜梨沙はますます赤くなる顔を俯かせて駆け去りました。

「ハハ、残念」

龍之介は肩を竦め、仕方なさそうにリムジンに乗り込みました。

「行ってらっしゃいませ」

トーマス達は龍之介を見送り、それぞれ持ち場に戻ります。

亜梨沙はウォークインクローゼットに隠れて、トーマスが玄関から奥へ歩いて行くのを見届けてから、鞄を肩にかけ、庭を走り出しました。

（トムに見られてるって思ったら、パパにキスできなかった……）

火照る顔を風を切って冷ましながら、亜梨沙は邸の広大な庭を出ました。

しばらく舗道を走って行くと、

「おはよう、有栖川」

その声にビクンと反応し、まるで格闘家のように闘気を漲(みなぎ)らせ、構える亜梨沙です。

今の亜梨沙なら世紀末覇王も倒せそうです。

声の主は早乙女(さおとめ)小次郎(こじろう)。通称セクハラ魔神です。

「それ以上近づくと、大声上げるわよ！」

亜梨沙はガルルと唸り声を上げながら、小次郎を威嚇します。

すると小次郎は肩を竦めて、

「何だよ、せっかく胸が大きくなる方法を教えてあげようと思ったのにさ。つれないなあ」

「え？」

亜梨沙は「胸が大きくなる」に思い切り反応してしまいます。貧乳女子の悲しいサガです。

「ど、どうすればいいの？」

興味津々の目で尋ねる亜梨沙ですが、

「こうするのが一番だってさ！」

小次郎はまた亜梨沙の胸を鷲掴み（できるのでしょうか？）しました。

「いやああ！」

亜梨沙は絶叫して、誰に教わった訳でもないのに、真空飛び膝蹴りを小次郎の顎に炸裂させました。

「ピン……ク……」

膝蹴りを食らいながらも、しっかり亜梨沙のヒラヒラのプリーツスカートの中を見ているツワモノの小次郎です。

「何するのよ、変態！」

亜梨沙は倒れている小次郎に更に罵声を浴びせます。

「あらあら、朝から仲のよろしい事で」

そう言いながら登場したのは、亜梨沙の親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）です。

その隣には勘違い街道まっしぐらの桃之木彩乃（ももののきあやの）もいます。

「どこが仲がいいように見えるのよ！？　このバカ、またセクハラしたんだから！」

亜梨沙は激怒して蘭に反論しました。

「蘭ちゃん、亜梨沙ちゃんは小次郎君と内緒で付き合っているんだから、見てみないフリをしましょうよ」

彩乃が妄想ワールドを展開します。亜梨沙は項垂れましたが、何も言いません。言えば言う程火に油なのが彩乃だからです。

「そのようね。行きましょ、彩乃」

蘭はクスッと笑って歩き出します。

「ちょっと蘭、待ちなさいよ！」

亜梨沙はプンスカ怒りながら蘭を追いかけました。

「ああ、待ってよ、二人共ォ」

彩乃が異世界から帰還して、二人を追います。

「お前、もうセクハラ止めたんじゃなかったのかよ？」

一部始終を見ていた小次郎の親友である高司譲児（たかつかさじょうじ）が言いました。

「おかしいなあ。麻莉乃先生に有栖川は喜んでるって聞いたんだけど」

小次郎は顎を撫でながら起き上がりました。

「麻莉乃先生に？　どういう事だ？」

譲児は不思議そうに尋ねました。小次郎は立ち上がって、

「麻莉乃先生に職員室に呼び出されて、てっきり有栖川の事で怒られるのかと思ったら、『有栖川さんは間違いなく貴方の事が好きよ。貴方にタッチされるのが嬉しいの。だからこれからも同じように接しなさい』って言われたんだよ」

その話を聞き、麻莉乃先生の魔女ぶりに気づく察しのいい譲児です。

（でも、どうしてそんな事をするんだろう、麻莉乃先生は？）

さすがの譲児も、麻莉乃先生の魂胆までは見抜けないようです。

（もしかして、麻莉乃先生、小次郎が好きなのか？）

間違った方向に推理を進める譲児です。

職員室の一角に一人の苦悩する教師がいました。

美津瑠木新之助（みつるぎしんのすけ）、三十歳。国語の先生です。

身長１７５ｃｍ、筋肉質で体育会系のスポーツ刈りですが、紺系のスーツを好み、目立つ事を極端に嫌う内気な性格です。

彼は天照（てんしょう）学園高等部に就職以来、麻莉乃先生の事を密かに思い続けています。

それもすでに五年。ストーカーとしてもかなり年季が入っている期間です。

その名前から想像されるようなエロい人間ではなく、至って真面目な新之助先生は、麻莉乃先生に声をかける事すらできません。

亜梨沙の男版です。もしかすると亜梨沙以上に恋に臆病かも知れません。

彼は麻莉乃先生の様子が二日前と違っている事に気づきました。

（麻莉乃先生は元々美しい人だけど、更に奇麗になった。何があったのだろう？）

新之助先生は、麻莉乃先生のわずかな感情の揺れすら察知してしまう究極のストーカーです。

そしてはたと気づきます。

（もしかして、好きな人ができたのか……）

全身から嫌な汗が一気に噴き出す新之助先生です。

（一体誰だ？　教師の中にそれほどの猛者はいないし、ほとんどが既婚者だ。まさか、生徒！？）

更に嫌な汗がジトジトと出て来ます。彩乃に匹敵する妄想癖があるようです。

「先生、早く来てくださいよ！　男子達が『自習だ！』って騒いでますから！」

おかっぱで眼鏡をかけた三年の女子生徒がムッとした表情で新之助先生に声をかけました。

「え？」

はっと我に返り、掛け時計を見る新之助先生です。

すでに授業開始から五分が経過していました。

「す、すまん！」

新之助先生は大慌てで準備をし、女子生徒について職員室を飛び出しました。

「先生、お疲れなんですか？」

女子生徒はさっきまで怒っていたはずなのに、ニコッとして尋ねて来ます。

「いや、ボンヤリしてしまっていたんだ。いつもすまんな、錦織（にしきおり）」

新之助先生は女子生徒にまた詫びます。

「もう、本当に世話の焼ける先生なんだから」

錦織と呼ばれた女子生徒は口ではそう言いながら、何だか嬉しそうです。顔が紅潮しています。

もしかして、恋しているのでしょうか？

「そう言うなよ」

新之助先生は、錦織さんの表情の変化にも気がつかない鈍感男です。

亜梨沙のクラスは麻莉乃先生の英語の授業でした。

「有栖川さん」

亜梨沙が鞄に教科書を入れていると、麻莉乃先生が話しかけて来ました。

「何でしょうか、先生？」

亜梨沙は顔を上げて立ち上がります。麻莉乃先生はニコッとして、

「有栖川さんは昨日、学園まで車で来ましたよね？」

「はい。申し訳ありません。遅刻しそうになったので、送ってもらいました」

亜梨沙はまさかそんな事を言われるとは思っていなかったので、麻莉乃先生の次の言葉を待ちました。

（また反省文？）

嫌な汗が背中を伝います。

「まあいいでしょう。その事に関しては、不問に付します」

麻莉乃先生の意外な言葉に、

「へ？」

と思わず間抜けな顔になる亜梨沙です。

「ですが、一応車を運転していた方に事情をお伺いしたいので、本日有栖川さんのお邸に行きますね」

麻莉乃先生の話は、亜梨沙の理解を超えていました。

（ど、どういう事？）

自分に余裕のない亜梨沙は、麻莉乃先生がトーマスを狙っているとは夢にも思いません。

「いいですね、有栖川さん？」

麻莉乃先生に念を押され、ハッと我に返る亜梨沙です。

「あ、はい」

麻莉乃先生は、亜梨沙にわからないようにニヤリとしました。

（我ながら名案ね。これであの執事さんとお近づきになれるわ）

魔女な麻莉乃先生です。

（そして、有栖川さんには早乙女君をけしかけておけば……）

もう魔王並みの麻莉乃先生です。越後屋とお代官様も裸足で逃げ出します。

そして放課後になりました。

「有栖川さん」

麻莉乃先生が玄関を出ようとしていた亜梨沙を呼び止めました。

「はい、先生」

亜梨沙は蘭と彩乃に先に行っててと小声で言ってから、麻莉乃先生に近づきます。

「申し訳ないのだけど、早乙女君の補習を監視して欲しいの。お願いしますね」

「え、私がですか？」

亜梨沙は思ってもいない方向からのピンチ襲来に驚きます。

「そうですよ。貴女は英語係なのですから、早乙女君のような生徒の面倒を見るのが役目です」

麻莉乃先生は職権乱用です。亜梨沙は溜息を吐き、

「わかりました……」

と項垂れて返事をします。

「早乙女君は教室で問題を解いていますから、見てあげてくださいね」

麻莉乃先生は会心の笑顔でそう言うと、スタスタと校舎を出て行ってしまいます。

「何で私が……」

亜梨沙は、英語係になんてならなければ良かったとつくづく思いました。

蘭と彩乃は学園を出て舗道を歩いています。

「亜梨沙ちゃん、どうしたのかしら？　またお説教かしら？」

妙に嬉しそうに蘭に訊く彩乃です。蘭は少々呆れ気味に彩乃を見て、

「さあ。わからないわ。私達の知らないところで、亜梨沙がまた何か仕出かしたのかも知れないわね」

と肩を竦めます。

「そうかあ。亜梨沙ちゃん、内緒で付き合っている小次郎君との事を麻莉乃先生に知られて注意されるのかな？」

彩乃の「ザ・ワールド」が解放されました。蘭はそこから逃げるように、

「どうかなあ。ああ、私、急用があるから、先に行くね！」

と言うと、またしても令嬢とは思えないような速さで走り去りました。

「ああ、蘭ちゃん！」

彩乃は世界記録にでも挑むかのような蘭の走りに驚きましたが、

「もう、仕方ないなあ。また帰ってジョニデ祭でも観ようか」

と呟くと、ニンマリして歩き出しました。

亜梨沙は気乗りしないまま、教室に戻ります。

中をこっそり覗くと、小次郎が懸命に問題を解いているのが見えました。

（何だ、あいつ、真面目にやってるのね）

少しだけ小次郎を見直す亜梨沙ですが、そう遠くない将来、それを後悔する事になります。

「頑張ってるね、早乙女君」

亜梨沙は小次郎に声をかけて近づきます。

「ああ、本当に来てくれたんだ、有栖川！」

小次郎が涙を流して喜んでいます。亜梨沙はキョトンとしました。

「麻莉乃先生が、有栖川は俺の事が好きだから、教室で待っていれば必ず来てくれるって言ったんだよ」

「えええ！？」

亜梨沙はもう訳がわかりません。

（何でそんな話になってるのよ！？　早乙女君は補習じゃないの？麻莉乃先生が言ったってどういう事？）

「感激だよ、有栖川！」

小次郎は泣きながら亜梨沙に抱きつこうとしました。

「何するのよ！」

亜梨沙の必殺技の一つ、幻の右ビンタが炸裂し、小次郎の身体がクルクルと宙を舞います。

「麻莉乃先生！」

亜梨沙は怒りの矛先を麻莉乃先生に向け、ボロ雑巾のように倒れ伏した小次郎を置き去りにして教室を飛び出しました。

その頃、麻莉乃先生は近くの喫茶店で着替えをすませ、亜梨沙の邸に来ていました。

普段より派手なピンクのパンツスーツです。

しかも胸元は吸い込まれそうなくらいに深く開いています。

グランドキャニオンのような谷間がそこに見えました。

（ああ、何だかドキドキして来たわ）

すでにトーマスと新婚旅行に出かけるところまでシミュレーションした麻莉乃先生です。

邸の門をくぐると、警備員が現れました。麻莉乃先生は亜梨沙のクラスの担任だと名乗り、邸に通されます。

警備員も麻莉乃先生の美しさにやられてしまったようです。

ポオッとして、歩き去る麻莉乃先生の形の良いお尻を見つめています。

麻莉乃先生の快進撃は続きます。

麻莉乃先生に気づいた庭師五人が仕事を忘れて食い入るように胸の谷間を見ています。

そして麻莉乃先生が玄関の前に着いた時、中からトーマスが現れました。

「いらっしゃいませ。亜梨沙お嬢様のクラスの担任の先生ですね？」

トーマスがキラッと白い歯を見せて微笑みました。

「は、はい」

麻莉乃先生の快進撃はそこで止まりました。

ここからはずっとトーマスのターンです。

彼の後ろについて来ているメイドは全員ポオッとしています。

麻莉乃先生も、トーマスを落とすつもりが自分が落ちてしまった事に気づけないほどポオッとしていました。

「ご用件をお伺いできますか？」

トーマスが笑顔で尋ねましたが、麻莉乃先生の耳にはすでに何も聞こえていません。

「先生？　いかがなさいましたか？」

麻莉乃先生が目を開けたまま気絶しているのにトーマスが気づい

たのは、それから一分後でした。

麻莉乃先生は邸の客間に運ばれ、ベッドに寝かされました。

トーマスが傍らで麻莉乃先生を看ています。するとそこに鬼の形相の亜梨沙が駆け込んで来ました。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

トーマスは振り返って亜梨沙に言いました。亜梨沙はまさかトーマスがいるとは思っていなかったので、びっくりして一瞬固まります。

（麻莉乃先生とトムが二人きりーー！？）

頭が沸騰しそうになる亜梨沙です。それでも何とか復活します。

「な、何があったの、トム？」

亜梨沙はトーマスを正面から見ると危険なのを知っているので、麻莉乃先生を見て尋ねました。

「私にもわかりません。玄関でお出迎えした時にお気を失われたようです」

トーマスの説明を聞き、ニヤリとする亜梨沙です。

（麻莉乃先生、もしかしてトーマス狙いだったの？　結婚を焦って

るって噂、本当だったのね）

麻莉乃先生が無謀な「攻撃」に出て無残に「撃沈」したのを知った亜梨沙はガッツポーズを決めます。

「どうなさったのですか、お嬢様？」

怪訝そうな顔で自分を見ているトーマスに気づき、

「ああ、何でもないわ。そう、わかった、ありがとう、トム」

と言うと、目を合わせないようにして客間を出る亜梨沙です。

「……？」

亜梨沙の言動に首を傾げるトーマスです。

結局、麻莉乃先生は落ち込んで有栖川邸を去りました。

亜梨沙は城を守り切った戦国武将の心境でホッとしました。

（でも、麻莉乃先生はそんな簡単には諦めないわ。また来るわね）

何度来ても無駄だと、ない胸を張る亜梨沙です。

そして翌日の朝です。

「では、行って来る」

龍之介はまた亜梨沙に頬を突き出します。

亜梨沙は昨日の事をすっかり忘れて、また行ってらっしゃいのキスをしかけますが、

（あ！）

とトーマスの存在を思い出します。

「ま、まだ風邪治っていないから、お預け！」

亜梨沙はまたしてもその場から逃げ出しました。

「そうか。仕方ないな」

龍之介は残念そうにリムジンに乗り込み、出かけました。

亜梨沙は龍之介が出かけたのを見て、こっそり邸を出ようとしましたが、

「お嬢様」

トーマスに呼び止められてしまいます。

「な、な、何？」

亜梨沙はドキドキしながらトーマスを見ます。

トーマスは何故か大きめのマグカップをトレイに載せて立っていました。

「私の生まれ故郷に伝わる風邪の特効薬です。どうぞお飲みください」

トーマスは亜梨沙に近づき、跪いてトレイを差し出します。

「あ、ありがとう」

亜梨沙は言われるがままにマグカップを手に取ります。

「これは？」

いい香りがする温かい飲み物です。亜梨沙は気になって尋ねます。

「レモンのお湯割りに蜂蜜を加えたものです。お身体が温まります」

トーマスは笑顔で言い添えます。亜梨沙はそれをうっかり見てしまいました。

（ああん、もう本当に今すぐお嫁にもらって、トムゥッ！）

とんでもない妄想を繰り広げる亜梨沙です。そして、グッとそれを飲みます。

「あったかい。飲み易い……」

亜梨沙は一気に飲み干してしまいました。

「それで明日からは、旦那様にキスできますね」

トーマスがマグカップを亜梨沙から受け取りながら言いました。

「あ、あなたが見てるからパパにキスできないんじゃないんだから！」

亜梨沙はトーマスの優しさと心遣いに感謝しながらも、口ではそんな事を言ってしまい、

「行って来ます！」

と鞄を肩にかけて走り出しました。

「行ってらっしゃいませ、お嬢様」

トーマスは深々と頭を下げました。

あなたが見てるからパパにキスできないんじゃないんだから！（後書き）

間違って数日早く投稿してしまいました。お見苦しい点はお許しください。

あなたにあの子がチョッカイ出すので気をつけて欲しいだけなんだから！（前書

遂に十二神将の名前が明らかになります（笑）。

あなたにあの子がチョッカイ出すので気をつけて欲しいだけなんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ　ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも内緒にしています。

「では、行って来る」

龍之介はいつものように会社に出勤です。

メイド十人、庭師五人、コック三人、警備員二十人が龍之介を見送ります。

そしてトーマスも見送ります。メイド達は龍之介に顔だけ向けてトーマスに目を向けています。

皆、トーマスの虜です。

警備員の一人も熱い視線をトーマスに送っています。どうやらそちらの方のようです。

「亜梨沙」

龍之介はいつものように亜梨沙に向かって頬を突き出します。

行ってらっしゃいのキスの要求です。

「もう、仕方ないなあ」

亜梨沙は本当は嫌ではないのに、苦笑いしながら父に近づきます。

トーマスが微笑んでこちらを見ているのがわかります。

（ここでまたキスしなかったら、私がトムを好きな事を悟られちゃう！）

亜梨沙は意を決して、ガツンと龍之介の頬にキスをしました。

「おう、今日は何だか気合が入っていたな、亜梨沙？　三日ぶりだからかな？」

龍之介は嬉しそうに亜梨沙を見下ろします。

亜梨沙はその「三日ぶり」に反応してしまいました。

「パ、パパ、そんな事、ここで言わないでよね！」

亜梨沙は真っ赤になってそこから駆け出し、玄関に飛び込みました。

龍之介には何の事かわかりません。

「あのくらいの年齢は、一番難しいな」

彼は肩を竦めてリムジンに乗り込みました。

「行ってらっしゃいませ」

トーマス達は走り去るリムジンに深々と頭を下げました。

早とちりが制服を着ているような性格の亜梨沙は、父がてっきり便秘の事を言ったと勘違いし、慌てて逃げ出したのでした。

（もう、パパッたら、私のお通じが三日ぶりだったなんて、トムの前で言わないでよね！）

龍之介が亜梨沙のお通じの事を知るはずがないのですが、いろいろとテンパっている亜梨沙にはそれがわかりません。

「ああ、また遅刻しそうだわ！」

亜梨沙は慌てて鞄を肩に駆け、庭を走り出します。例によって、赤チェックのプリーツスカートがヒラヒラしてパンチラ必至です。

「お嬢様、どうなさったのですか？」

庭の先に何故かトーマスがいます。亜梨沙は慌ててスカートの裾を押さえ、

「遅刻しそうなの！」

とトーマスから顔を背けて答えます。するとトーマスは、

「では、私がお送り致します」

「この前その事で担任の先生に注意されたから、ダメよ！」

亜梨沙はトーマスの横をすり抜け、また走り出しました。

「坂野上先生でしたら、これからはいつでも車で来てくださいとおっしゃってくださいましたが？」

トーマスのその言葉に、亜梨沙はクラス担任の坂野上麻莉乃（さかのうえ まりの）先生の恐るべき陰謀を感じます。

「そうなんだ……」

亜梨沙は麻莉乃先生の用意周到さに項垂れました。

「では、お乗りください、お嬢様」

トーマスはたちどころに亜梨沙専用の白のリムジンで乗り付け、亜梨沙の右手を取って後部ドアを開き、彼女を乗せてくれました。

またトーマスに握られた右手をポオッと見つめる亜梨沙です。

「到着致しました、お嬢様」

またポオッとしているうちに学園に着いてしまいました。

（ああ、この時間が短過ぎるわ……）

トーマスと同じ車内にいる喜びをもう少し堪能したい亜梨沙でした。

学園前は、亜梨沙のリムジンの登場に人だかりができています。

亜梨沙目当ての男子達もたくさんいるのですが、それ以上にトーマス目当ての女子生徒がたくさんいます。

よく見ると、女性の先生方まで遠巻きにリムジンを見ています。

恐るべし、トーマスです。

「おはようございます、有栖川さん」

そこへ魔女の麻莉乃先生が笑顔全開、胸元も全開で現れました。

いつもより目に来る強烈なピンクのパンツスーツです。

某芸人夫婦を思い出させます。

そして、男子達の、

「おおお！」

という雄叫びのような歓声と、

「はあ」

という女子生徒達の溜息が聞こえます。

「お、おはようございます、麻莉乃先生」

亜梨沙はトーマスにまた右手を掴まれてリムジンを降りたので、ポオッとしたままで挨拶しました。

麻莉乃先生はトーマスに微笑んで、

「先日は失礼致しました」

とお辞儀をします。トーマスもそれに応じて、

「こちらこそ、至らないお世話で申し訳ありませんでした」

と華麗にお辞儀を返します。それを見て失神する女子生徒が何人もいました。

麻莉乃先生も危うくクラッと来ましたが、さすが三十路目前の貫禄です。踏み止まりました。

（もう貴方の視線や行動くらいで落とされなくてよ、執事さん）

麻莉乃先生は悪い魔女の顔になりました。

「またお話したいですわね、バトラーさん」

麻莉乃先生は大きく深く開いた胸元を強調して言います。ドヤ顔が怖いです。

男子生徒の多くが、それを見て前屈みになりました。

何があったのでしょうか？

「いつでもおいでください。私のような者でよろしければ、お相手させていただきます」

トーマスは白い歯をキラッと輝かせて言いました。

「ふうう……」

その輝きの直撃を受けて、麻莉乃先生はとうとう倒れてしまい、近くにいた女子生徒達もクラクラしてしまいます。

「いかがなさいましたか、坂野上先生？」

トーマスは崩れ落ちる麻莉乃先生を素早く抱き止めます。

（いやああ、トムゥッ！）

それを目の当たりにして心の中で絶叫する亜梨沙です。

天照学園高等部の正門付近は、トーマスによって大混乱に陥りました。

「有栖川亜梨沙の邸の執事か。おのれ、坂野上先生を抱きしめやが

って！」

それを離れた場所から見ている　美津瑠木新之助（みつるぎしんのすけ）先生です。

彼は麻莉乃先生が好きなので、トーマスに敵意を抱きました。

（許さん、許さんぞ！　いつか勝負してやる！）

勝手に対戦モードの新之助先生です。

そして、麻莉乃先生は保健室に運ばれ、亜梨沙のクラスのホームルームはクラス委員が仕切り、一時間目の英語は自習になりました。

「それにしても凄かったわね、亜梨沙の邸の執事さん」

親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）が言います。

「大した事ないわよ。麻莉乃先生、具合が悪かったんじゃないの？」

亜梨沙はそう言いながら、

（許してェ、トムゥ！　本心じゃないのよォ！）

と心の中で血の涙を流します。

（でも、さすがトムね。麻莉乃先生を返り討ちよ）

密かにほくそ笑む亜梨沙です。

「そうかなあ。私はジョニデの方がカッコいいと思うわ」
天然炸裂娘の桃之木彩乃（ももののき　あやの）が言います。
彼女は遠くからトーマスを見ただけなので、本当の凄さを知りません。
「そうね。ジョニデの方がカッコいいわね」
また心にもない事を口にし、
（そんな事ないわよォ、トムゥ！　貴方が一番よォ！）
と心の中で絶叫する亜梨沙です。もう重症です。
「でもいいなあ、亜梨沙は。私の邸の執事は全員おじ様で、全くときめかないのよね」
蘭が溜息混じりに言います。すると亜梨沙はここぞとばかりに、
「あれえ、蘭はトーマスが気になるのかなあ？」
とからかいます。しかし、蘭は、
「ええ、とっても気になるわ」
その返しにギクッとする亜梨沙です。それでも何とか、
「だったら今日ウチに来れば？　会わせてあげるわよ」

亜梨沙は心の内で、

（いくら男子捕獲率１００％の蘭だって、トムにかかれば敵じゃないわ）

と得意そうです。別に亜梨沙が威張る事ではありませんが。

「遠慮しとくわ。ちょっと忙しいのよ、いろいろと」

何故か蘭は乗って来ません。

（さては蘭め、麻莉乃先生が撃沈したので、警戒してるな？）

亜梨沙はニヤリとしました。

それは半分当たっています。

蘭はトーマスより、亜梨沙の邸の庭にいる通称十二神将のドーベルマン達が怖いのです。

（今はまだ決戦の時ではない）

蘭は亜梨沙の挑発を受け流す事にしました。

そして、下校時刻です。

「また明日ね！」

陸上の短距離スプリンター並みの速さで学園を去る蘭です。

「一体どうしたのかしら、蘭は？」

亜梨沙が首を傾げていると、彩乃が、

「きっと何か嵌(はま)る趣味を見つけたのよ、蘭ちゃんも。でも、ジョニデだったら困るな」

と天然を炸裂です。

「それは絶対ないと思うよ」

亜梨沙は苦笑いして言いました。

（あの現実主義者の蘭が芸能人に嵌ったりする訳がないわ）

そして急に不安になる亜梨沙です。

（蘭は目的のためなら手段を選ばないタイプだわ。トムが危ないかしら？）

しかし、今朝の「戦い」を見る限り、蘭がトーマスに勝てる要素はないと思う亜梨沙です。

（心配ないか）

結構楽天的な亜梨沙です。

「隙あり！」

そんな亜梨沙の背後から、懲りない男、早乙女小次郎が迫ります。

「甘い！」

亜梨沙の左回し蹴りが炸裂し、小次郎は無残に跳ね飛ばされました。

「今日は、青の……ボーダーか……」

それでもしっかり亜梨沙のスカートの中だけは見逃さない小次郎です。

「何考えてるのよ、あんたは！？」

亜梨沙は仁王立ちで罵りました。ボロ雑巾のような小次郎からは返事はありません。

「多分何も考えてない」

離れたところから見ていた小次郎の親友である高司譲児が呟きました。

一方、邸に帰った蘭は自分の部屋の大きな扉の前で深呼吸しています。

「今日は逃げないわ。苦手は克服しないとね」

蘭はまるで戦場に赴く兵士のような顔で扉を開き、中に入ります。

中から犬の鳴き声が聞こえ、

「いやああ！」

蘭の断末魔のような叫び声が聞こえました。

何をしているのでしょうか？

亜梨沙は彩乃と邸の前で別れ、庭を歩きます。

（大丈夫だと思うけど……）

また不安になる亜梨沙です。

そこへ亜梨沙に気づいて駆け寄って来る十二神将です。皆大喜びです。

「只今、金比羅（こんぴら）、伐折羅（ばさら）、迷企羅（めきら）、安底羅（あんちら）、？？羅（あじら）、珊底羅（さんちら）、因達羅（いんだら）、波夷羅（はいら）、摩虎羅（まこら）、真達羅（しんだら）、招杜羅（しゃとら）、毘羯羅（びから）！」

亜梨沙にじゃれつく十二神将達ですが、知らない人が見たら、ドーベルマンに襲われている女子高生に見えるでしょう。

亜梨沙はしゃがみ込んで十二神将達を撫でました。前から見ると多分パ〇ツ丸見えです。

「ねえ、貴女達、蘭がトムを狙っているらしいの。大丈夫かな？」
そんな事を犬に訊くのもどうかと思われます。でも、亜梨沙は真剣なのです。
十二神将達は亜梨沙に元気がないので、心配そうです。
クウンと鼻を鳴らして、亜梨沙を慰めているようです。
「お帰りなさいませ、お嬢様」
そこへいきなりトーマスが現れました。
「た、只今、トム」
亜梨沙は慌てて立ち上がります。
（み、見られた？）
真っ赤になる亜梨沙です。
（でもトムになら見られても……）
バカな妄想をしてハッと我に返ります。
「いかがなさいましたか、お嬢様？」
不思議そうな顔で自分を見ているトーマスに気づき、

「あ、あなたにあの子がチョッカイ出すので気をつけて欲しいだけなんだから！」

とまたしても意味不明な事を言って駆け去る亜梨沙です。

「ありがとうございます、お嬢様」

トーマスは恭しくお辞儀をしました。

それをメイド達三人が見てしまい、卒倒しました。

あなたにあの子がチョッカイ出すので気をつけて欲しいだけなんだから！（後書

またまたお読みいただき、ありがとうございます。

あなたに落ちない女子なんていないんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも内緒にしています。

チラッと見ただけで女性が虜になってしまうトーマス。

亜梨沙は彼に惹かれながらも、その魔法のようなイケメン加減に引いています。

（でも素敵。トムとなら、絶対に幸せになれる）

脳内で新婚生活を始めている亜梨沙です。

（でも、トムには恋人とかいないのかしら？）

あれほどのイケメンですから、いない方が不思議です。

（もしいないとしたら、あちらの方？）

亜梨沙はいけない妄想をしそうになり、

「絶対違う！」

と叫んでしまいました。

ここまで惹かれた相手が、実は女性が好きではないとしたら、亜梨沙はどうかしてしまいそうです。

「何が絶対違うんだ、有栖川？」

現代文の授業中でした。

目の前には、筋肉質で体育会系の美津瑠木新之助（みつるぎしんのすけ）先生が仁王立ちしています。

「あ、あの、すみませんでした！」

亜梨沙は慌てて立ち上がり、頭を下げました。

「最近たるんでるぞ、有栖川」

新之助先生は亜梨沙の背中をポンと叩きました。

「はい」

亜梨沙はすっかりションボリして席に座りました。

新之助先生にとって、憧れの人である坂野上麻莉乃(さかのうえ まりの)先生が夢中になっているトーマスは恋敵です（但し一方的な）。

そして、そのトーマスのいる邸の住人である亜梨沙も、新之助先生から見ると敵なのです。

（有栖川が遅刻したから、あいつが学園に来て、麻莉乃先生と出会ってしまったんだ）

さすが国語の先生です。「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」を地でいっています。

（美津瑠木のヤロウ、俺の有栖川に気安く触りやがって！）

その様子を横目で見ていたセクハラ大魔神の早乙女(さおとめ)小次郎(こじろう)が脳内激怒です。

それより、亜梨沙は小次郎のものでもないと思われます。

（いつか勝負してやる）

何故か、新之助先生と小次郎の思いはシンクロしていました。

それぞれの相手は違っていましたが。

現代文の授業が終わり、お昼休みです。

トイレに行こうとして立ち上がった亜梨沙を小次郎が急襲しました。

「何落ち込んでるんだよ、有栖川」

いきなり背中から抱きつく小次郎です。

「あんたこそ何してんのよ、出っ歯！」

亜梨沙は小次郎の奥襟をムンズと掴むと、目にも止まらぬ早業で背負い投げをしました。

「ぐええ！」

小次郎は床に叩きつけられ、悶絶しました。

「あらあ、小次郎君が亜梨沙ちゃんを心配してくれたのに、亜梨沙ちゃんたら酷い」

ド天然娘の桃之木彩乃（ももののき あやの）が悲しそうな顔で言います。

「どこが心配してるのよ、彩乃！？　いきなり後ろから抱きついて来て、只の変態よ！」

亜梨沙は烈火の如く怒り捲りです。

「だって、落ち込んでいる彼女を見たら、彼氏としては、後ろから抱きしめてあげたくなるでしょ？」

彩乃ワールドが解放されました。亜梨沙は呆気に取られます。

「私だったら、ジョニデに後ろから抱きしめられたら、嬉しいけどなあ」

彩乃の妄想は止め処がありません。

「付き合い切れないわ」

亜梨沙は親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）を誘おうと思って彼女を見ますが、蘭は何かの本を夢中で読んでいます。

「仕方ない、一人で行くか」

亜梨沙は溜息を吐いて教室を出ようとします。

「何だ、連れションしたかったのか、有栖川？」

復活した小次郎が懲りずにまた絡みます。

「うるさい！」

今度は鳩尾（みぞおち）に正拳が炸裂です。

「ぐええ……」

小次郎は白目を剥いて後ろに倒れました。

「バカ、最低！」

亜梨沙はプンスカしながら教室を出ました。

「今のは小次郎君が悪いわよ。女の子にそんな事を言ってはダメ」

彩乃もムッとして倒れている小次郎に言いました。

彩乃が怒るのを小次郎は初めて見た気がして、ドキッとしてしまいます。

(桃之木も可愛いな)

気が多い小次郎です。

「バカだな、本当に」

それを見て呟く小次郎の親友の高司譲児(たかつかさじょうじ)です。

「それにしても……」

本を読んでいる蘭を心配そうに見る譲児です。

(蘭さん、何に夢中なんだろう?)

譲児は蘭がトーマスを落とそうとしている事に気づいています。

ですから、蘭の行動が気になっています。

(ならば俺も封印を解くしかないか)

何かを決意した譲児です。

トイレをすませた亜梨沙が教室に向かっていると、

「二年H組の有栖川亜梨沙さん、至急職員室まで来てください」

麻莉乃先生の声が校内アナウンスで流れました。

「何だろう？」

亜梨沙は嫌な予感がしました。

（美津瑠木先生が麻莉乃先生に言いつけたのね。あの先生、麻莉乃先生が好きだから……）

まさか自分が新之助先生に逆恨みされているとは夢にも思わない亜梨沙です。

亜梨沙は職員室に向かう途中で、例の美術室の前を通りました。

先日、思わぬキスシーンを見てしまった事を思い出し、赤面する亜梨沙です。

（またドアが少しだけ開いてる……）

すでに心臓は凄まじい速さでビートを刻んでいます。

「うん、うん」

女性の甘ったるい声が聞こえます。

（見ちゃダメ！）

そう思いながらも、つい隙間から中を覗いてしまいます。

（あああ！）

亜梨沙は失神しそうでした。

今回中にいたカップルは、前回亜梨沙が見たのと同じ三年生の男女です。

男子は上半身裸、女子はブラだけになっていて、抱き合い、もつれ合うようにキスをしています。

ディープなキスです。グシュグシュと唾の音がし、男子がそれに合わせて女子の胸をブラの上から揉んでいます。

「……」

亜梨沙は壊れてしまいそうです。

やがて男子はブラをずらし、直接乳房を揉み始めました。

「ああん……」

女子が堪らなくなったのか、喘ぎ声をあげました。

「覗きはダメよ、二年生」

後ろからいきなり声をかけられ、心臓が止まりそうになる亜梨沙です。

「あ、え、その……」

慌てて振り返ると、そこに立っていたのは保健室の魔女と呼ばれている里見美玲先生でした。

「さ、里見先生……」

亜梨沙は覗きをしていたと思われた事と、里見先生に見つかった事でパニックになりかけていました。

膝まである白衣の間から覗く短い赤の革製のスカートに黒のストッキングを履き、チェリーピンクの楕円形の眼鏡をかけ、栗色のロングヘアをポニーテールにしている里見先生は男子生徒の人気を麻莉乃先生と二分していると言われています。

普段はボンヤリした感じなのも人気の秘密です。

「ここで見た事は誰にも言ってはダメよ、二年生」

里見先生は眼鏡をクイッと上げると、スッと身を翻して去って行きました。

「……？」

亜梨沙は里見先生の言った事の意味がわかりませんでした。

（頼まれてもこの中の出来事は誰にも言えないよ……）

亜梨沙はハッとして、職員室へと走りました。

（早く行かないと、またあの隠れ巨乳にネチネチ言われるわ）

亜梨沙は麻莉乃先生のムッとした顔を思い浮かべました。

結局、お昼休みの大半を麻莉乃先生のお小言に費やしてしまった亜梨沙は、購買でアンパンと牛乳を買い、教室に戻りました。

「おう、有栖川、牛乳は毎日二本は飲んだ方が、貧乳のためになるらしいぞ」

懲りない男の中の男である小次郎がからかいます。

「やかましい！」

亜梨沙のエルボースマッシュが小次郎の鼻を直撃しました。

「ぶへえ！」

小次郎は鼻血を噴きながら仰け反って倒れました。

（やっぱり、桃之木に乗り換えようかな？）

鼻血に塗れながらバカな事を考えている小次郎です。

その日の亜梨沙は、小次郎のセクハラと美術室の出来事を交互に思い出し、更に新之助先生と麻莉乃先生の事も交互に思い出しました。

「疲れた……」

フラフラしながら、校庭を歩く亜梨沙です。

「大丈夫、亜梨沙？」

本を読んでいた蘭が、あまりにも辛そうな亜梨沙を見かねて声をかけました。

「大丈夫。今日はいろいろあったから、ちょっと参っただけ」

亜梨沙は苦笑いして蘭を見ました。

「参った参った、伊勢神宮、なんつってな」

懲りない小次郎がそう言いながら亜梨沙達の横を通ります。

「きゃああ！」

亜梨沙は小次郎にスカートを捲られました。

「おお！」

周囲にいた男子達が目を見開きました。思わず携帯のカメラを向けるバカもいます。

「何するのよ！」

亜梨沙の電光石火のビンタが小次郎を跳ね飛ばします。

「ぐへえ！」

小次郎はフィギュアスケートの選手ばりに回転して地面に落ちました。

「今日はクマさんパンツか……」

それでも亜梨沙のスカートの中を見逃さない小次郎でした。

「もう、信じられない！」

亜梨沙は怒りＭＡＸ状態で歩き出し、前方に驚くべき人物を見つけてしまいます。

「お疲れ様です、お嬢様」

何故かトーマスが亜梨沙専用の白のリムジンで校門の前に来ていました。

周囲はすでに虜となった女子生徒で溢れ返っています。

「ト、トム……」

自分の暴力的なところを見られてしまったと思い、亜梨沙は動揺します。

「わ、私、先に帰るね！」

何故か蘭が逃げるように走り去りました。

「失礼、トーマス」

蘭はトーマスと目を合わせないようにして、学園から出て行ってしまいました。

「お気をつけてお帰りください、桜小路様」

トーマスは言いました。

「お呼び立てして、申し訳ありません、バトラーさん」

そこへ隠れ巨乳、いえ、麻莉乃先生が現れました。

麻莉乃先生もトーマスの目力（めぢから）の直撃を受けないように、微妙に視線を外して近づいて来ます。

（麻莉乃先生、また何か企んでるのね！）

亜梨沙はキッとして麻莉乃先生を睨みます。

「いえ。旦那様は多忙ですので、私が代わりに参りました」

トーマスは華麗にお辞儀をします。

「きゃああ！」

それを見て多くの女子生徒が失神しました。

スケベな男子達は、

「大丈夫か？」

と言って助けるフリをしてあちこち触っています。

人間のクズです。

「あら、有栖川さんもいたのね。ちょうど良かったわ」

麻莉乃先生はたった今亜梨沙の存在に気づいたような顔で言いました。

「お父様にお手紙を書きました。貴女の最近の授業態度が極めてよろしくない事を」

麻莉乃先生のその言葉に蒼ざめる亜梨沙です。

（どうしてそれをトムの前で話すのよ！？）

亜梨沙はパニックになりそうです。

「これがそのお手紙です。有栖川さんのお父様にお渡しください」

麻莉乃先生はニコッとして封書を差し出します。

その時もちろん、胸の谷間を見せ付けるのも忘れません。

「畏(かしこ)まりました、坂野上先生。確かにお預かり致します」

トーマスは恭しくそれを受け取りました。

「では、ご機嫌よう」

麻莉乃先生は勝ち誇ったような顔で背を向け、学園に戻って行きました。

「失礼致します」

トーマスは会釈しました。そして、

「お嬢様、よろしければ、お車でお帰りください」

と亜梨沙を見て言いました。亜梨沙はギクッとして、

「え、ええ」

トーマスは亜梨沙の暴力にも授業態度にも反応を示しません。

(私の事なんか、何とも思っていないのね)

そう思えて来て、急に悲しくなる亜梨沙です。

亜梨沙はトーマスに右手を取られ、後部座席に乗りましたが、ショックが大き過ぎてそれすら気づいていません。

トーマスは亜梨沙を乗せると、運転席に戻ります。

その時、校門の外から里見先生が入って来ました。

亜梨沙は里見先生に気づきます。

（里見先生もトーマスの虜……）

そう思い、また悲しくなる亜梨沙です。

「あら、どちらの執事さんですか？」

ところが里見先生は真顔でトーマスに対しています。

（え？　どういう事？）

トーマスの無敵伝説が瓦解したのでしょうか？

「有栖川グループのお邸の執事を努めます、トーマス・バトラーと申します」

トーマスは深々とお辞儀をします。

それを見てまた多くの女子生徒達が気絶しました。

でも、里見先生は何ともないようです。

「そうですか。私は里見美玲。この学園の保健担当です。どうぞよろしく」

里見先生はニコッとして挨拶を返しました。

（えええ！？）

信じられない光景を目の当たりにした亜梨沙は唖然としました。

（どういう事なの！？）

トーマスの「敗北」が信じられない亜梨沙です。

別にトーマス自身は負けたとは思っていません。

亜梨沙の妄想ジャッジです。

「こちらこそ、よろしくお願い致します」

トーマスは会釈をし、運転席に乗り込みました。

「お嬢様、お車出します」

トーマスは言いました。

「え、ええ」

亜梨沙はうわの空で返事をします。

そして、呆然としているうちに邸に到着しました。

「お嬢様、到着致しました」

後部ドアを開き、トーマスが亜梨沙を外に連れ出します。

「あ、ええ……」

亜梨沙はポカンとしたままでリムジンを降りました。

「お嬢様、どうなさいましたか？」

トーマスは亜梨沙の様子がおかしいので、心配になって声をかけます。

亜梨沙は目の前にトーマスの顔があるので、慌てて視線を逸らします。

それでも顔が真っ赤になってしまうのがわかりました。

「あなたに落ちない女子なんていないんだから！」

また訳のわからない事を言って駆け出す亜梨沙です。

「ありがとうございます、お嬢様」

トーマスは駆けて行く亜梨沙に向かって深々とお辞儀をしました。

それを見たメイド五人とそちらの世界の警備員が卒倒してしまいました。

あなたに落ちない女子なんていないんだから！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

次回、里見先生の秘密がわかります。

他の女性に優しくしたら許さないんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ　ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも内緒にしています。

そんな無敵（あくまでも亜梨沙視点）のトーマスが、高等部の保健の先生である里見美玲（さとみ　みれい）先生と普通に会話を交わしたのを見て、亜梨沙は衝撃を受けました。

里見先生はトーマスの笑顔にもお辞儀にも無反応（あくまで亜梨沙視点）でした。

亜梨沙は、トーマスの敗北（あくまで亜梨沙視点）が信じられません。

（里見先生って、男の趣味が変わっているのかしら？）

里見先生不細工至上主義疑惑まで妄想してしまう亜梨沙です。

（私のトムが里見先生如きに遅れをとるなんて、あり得ない。きっと里見先生は不細工が好きなのよ）

疑惑が確信に勝手に変わってしまう亜梨沙です。

そもそも、トーマスは亜梨沙のトーマスではありませんし、彼自身は勝ち負けを考えていません。

「そうよ、きっとそうだわ！」

亜梨沙は立ち上がって大声で言いました。

「何がそうなんですか、有栖川さん？」

亜梨沙の天敵である隠れ巨乳の坂野上麻莉乃（さかのうえ まりの）先生の英語の授業中でした。

「す、すみませんでした！」

亜梨沙は慌てて頭を下げ、座りました。クラス全体がクスクス笑っています。

心配そうな顔をしているのは、セクハラ大魔神の早乙女（さおとめ）小次郎（こじろう）と亜梨沙の親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）、桃之木彩乃（ももぬき あやの）だけです。

「有栖川さん、今日は居残りしてくださいね」

麻莉乃先生は冷たい顔と口調で言いました。

「はい……」

亜梨沙は項垂れて返事をしました。

亜梨沙を見ていた蘭は、その先の席が空席になっているのに改めて気づきます。

（高司君、休みだっけ）

蘭に猛アタックをかけて来ている高司譲児は今日は病欠でした。

蘭は譲児のアタックを撥ねつけながらも、彼の紳士的なところは評価しており、誰彼なく同じように接する社交性も買っています。

（恋人にはできないけど、友人としては一級なのよね）

今はトーマスに狙いを定めて努力中の蘭には、譲児がつけ入る隙はないようです。

やがて授業が終わり、

「有栖川さん、居残りは取りやめにします。今日は緊急家庭訪問をしますので、そのつもりで」

麻莉乃先生は勝ち誇ったような笑顔で亜梨沙に告げ、教室を出て行きました。

（か、家庭訪問！？）

亜梨沙は麻莉乃先生の企みを感じ取りました。

（また、私のトムにチョッカイ出すつもりね！　どうせ返り討ちよ）

亜梨沙はニヤリとしました。それより、トーマスは亜梨沙のトーマスではありません。

麻莉乃先生の緊急家庭訪問発言は、蘭にも衝撃的でした。

（麻莉乃先生、また仕掛けるつもりね？　そうはさせないわ）

蘭もニヤリとします。何を企んだのでしょうか？

魔女対魔女のバトルが始まりそうです。

休み時間になったので、亜梨沙と蘭と彩乃は連れ立ってトイレタイムです。

「有栖川、毎日牛乳飲んでるか？」

小次郎が背後から廊下を歩く亜梨沙の胸を揉みました。

「いやああ！」

亜梨沙は小次郎の両手を掴むと、合気道の要領で小次郎の体重を利用して投げ飛ばしました。

「ぐえ！」

そして、倒れた小次郎の腹に正拳突きを決めます。

「バカ、変態、大っ嫌い！」

そう言い捨て、亜梨沙は蘭と彩乃と共に歩き去りました。

「小次郎君、牛乳を飲んでも胸は大きくならないんだよ」

彩乃が立ち去り際に小次郎に言いました。

（ああ、潮時かなあ。桃之木に乗り換えるか）

またバカな事を考える小次郎です。

彩乃城を攻略するには、ジョニデ将軍に勝たねばなりません。

小次郎が全身整形してもジョニデに勝てる可能性はないでしょう。

トイレタイムを終え、鏡の前で髪型を気にしながら、亜梨沙は彩乃に尋ねます。

「彩乃、牛乳飲んでも、胸大きくならないってホント？」

それを聞きつけ、蘭は呆れます。

「本当よ。私もチャレンジしたけど、大きくならなかったの」
彩乃は目をウルウルさせて悲しそうに言いました。
「そ、そうなんだ」
亜梨沙は彩乃を見て苦笑いします。
（十分でっかいでしょ、あんたは！）
亜梨沙は先に出て行く蘭とそれを追いかけるように小走りになる彩乃の胸がユサユサ揺れているのを見て、大きな溜息を吐きました。
（私だって、少しくらいは……）
その場跳びをしてみますが、全く揺れを感じない亜梨沙でした。

そしてお昼休みです。
亜梨沙が何よりも待ち侘びていた時間になりました。
今朝、亜梨沙はトーマスから、
「本日は購買がお休みで、お弁当の日とお伺い致しました。これをお持ちください。お口に合うとよろしいのですが」
と渡されたトーマス手作りのお弁当を持って来ているのです。

「そう。ありがとう。口に合わなかったら、残して来るわね」

そんな強がりを言って、

(絶対にそんな事しないわよ、トム！　ご飯一粒だって残しはしないわ！)

心の中で血の涙を流しながら詫びる亜梨沙でした。

「何、ニヤニヤしてるの、亜梨沙？」

蘭が声をかけました。亜梨沙はギクッとして、

「え、ニヤニヤなんかしてないよ」

と慌てて言い繕(つくろ)います。

「わあ、亜梨沙ちゃんのお弁当凄いね」

彩乃が亜梨沙が出した三段重ねの重箱を見て言いました。

「トムが作ってくれたのよ、頼んでもいないのに」

亜梨沙はいかにも迷惑そうに言います。

(嘘よォッ、トムゥ！　毎日作って欲しいくらいよォ！)

心の中で絶叫する亜梨沙です。

中に入っていたのは、英国育ちのトーマスが作ったとは思えない

ような純和風の料理でした。

天ぷら（海老二本・金時さつま芋・キス・ししとう・なす）、お刺身（まぐろ・鯛・いか刺し他）、　焼き魚、有頭海老、厚焼玉子、ちらし寿司、お新香、フルーツ、お吸い物まで付いています。

「仕出しのお弁当並みね。凄いわ、貴女のところの執事さん」

蘭は羨ましそうに言いました。

「それほどでもないわよ」

亜梨沙はそう言いながらも、

（そんな事断じてないわよ、トムーッ！）

心の中で叫びます。

取り敢えず携帯のカメラでお弁当を並べて撮る亜梨沙です。

「何だ、亜梨沙、口ではけなしているくせに、本当は凄く嬉しいんでしょ、お弁当を作ってもらったのが？」

蘭がからかいました。

「そ、そんな事ないわよ」

真っ赤になるわかり易い亜梨沙です。

（やっぱり亜梨沙はあの執事さんが好きなのね？）

蘭に気づかれてしまったのを知らない亜梨沙です。

亜梨沙はトムの手作り弁当をわずか数分で完食しました。

唖然としてそれを見ている蘭と彩乃です。

「は！」

我に返る亜梨沙です。

（美味し過ぎて、けもののように食べてしまった……）

「あー、お腹空いてたので、全部食べちゃったわ」

必死に言い繕おうとしますが、蘭は白い目で見ています。

彩乃はまだ驚いているようです。

（誤魔化せてない？）

嫌な汗が出て来てしまう亜梨沙です。

「亜梨沙ちゃん、凄いよ。所要時間、二分十五秒。今までで最速だよ」

彩乃がストップウォッチを見せて言いました。

唖然とする亜梨沙と蘭です。

「あ、いけない、用事があるのを忘れてた。ごめんね、二人共」

蘭は急に思い立ったように立ち上がり、教室を飛び出して行きました。

「最近の蘭ちゃん、様子がおかしいね、亜梨沙ちゃん」

彩乃がストップウォッチを鞄にしまいながら言います。

「そうだね」

亜梨沙は蘭がトーマスを狙っているので、気が気ではないのです。

（でも、私のトムは、蘭なんかに落とされたりしないわ）

まだトーマスが自分の占有物だと思っている亜梨沙です。

「失礼します」

蘭が行ったのは、保健室でした。

トーマスが只一人落とせなかった（あくまでも亜梨沙視点）人物、里見美玲先生がいます。

里見先生は机に向かって書類に目を通していました。

白衣の間から覗く胸元の大きく開いた黒のブラウスを着て真っ赤なレザースカート、黒いストッキングを履いたすらりとした脚を組み、椅子に座っています。

「あら、桜小路さん、どうしたの？　食べ過ぎ？」

里見先生はニコッとして振り返りました。栗色のポニーテールがフワッと揺れます。蘭は苦笑いして、

「いえ、違います。実はご相談があるのです」

「あら、何かしら？」

里見先生はパイプ椅子を蘭に出して尋ねました。

「私、好きな人ができまして」

「まあ、素敵」

里見先生はチェリーピンクの眼鏡をクイッと上げます。

「先日、里見先生もお会いになりましたよね。亜梨沙の邸の執事さんなんです」

「ああ、あの方ね。イケメンよね」

里見先生は微笑んで応じました。蘭は里見先生に顔を近づけ、

「それなのに、麻莉乃先生がその執事さんを狙っているらしいんです。どうしたらいいでしょうか？　麻莉乃先生が相手では、太刀打

ちできないと思って……」

蘭はさも悲しそうな顔をして、里見先生を見つめます。

「坂野上先生が？」

微笑んでいた里見先生が動揺したのを見て、蘭は心の中でガッツポーズです。

（食いついたわね）

「それで今日、麻莉乃先生は亜梨沙の事で邸に行くらしいんです。でも、本当はあの執事さんに迫るつもりなんですよ、きっと」

蘭は俯く事で悲しみを表現します。里見先生は更に目が泳ぎ、動揺の色が濃くなりました。

「私、心配で……」

蘭は両手を組み、懇願するようなポーズで里見先生を上目遣いで見ました。

「わかったわ、桜小路さん。教師が、生徒の邸の執事に色目を使うなんて許しがたい事ね。私から坂野上先生に注意しますから、心配しないで」

里見先生は蘭の手をギュッと握りしめて言いました。

「はい」

蘭は目を潤ませる迫真の演技で頷きます。

（これでよしと）

蘭は保健室を出ながらニヤリとしました。

（桜小路の奴、昼飯で腹でも壊したのかな？）

ちょうど通りかかった小次郎が勝手に蘭を食当たりにしてしまいました。

里見先生は、蘭が退室するとすぐに保健室を出ました。

（麻莉乃先生、もう私、決心したわ）

里見先生はそのまま職員室まで行きました。

（ああ、いるわ、麻莉乃先生……）

顔を赤らめて麻莉乃先生を見る里見先生です。

「どうされました、里見先生、赤い顔して？」

そこに美津瑠木新之助（みつるぎしんのすけ）先生が現れました。

「あ、美津瑠木先生、坂野上先生はいらっしゃいますか？」

赤い顔の里見先生に上目遣いで見上げられ、「麻莉乃先生一筋」

が揺らぎそうになる新之助先生です。

「ああ、いらっしゃいますよ。呼びましょうか？」

何だかんだ言って、麻莉乃先生と近づきたい新之助先生は嬉しそうに大声で尋ねます。

「いえ、いらっしゃるのならいいんです。失礼します」

里見先生は新之助先生を押し退けるようにして中に入りました。

麻莉乃先生も、新之助先生の声が大きいので、里見先生が来た事に気づいていました。

「何でしょうか、里見先生？」

麻莉乃先生は微笑んで言いました。

「えっと、お手すきの時で結構ですから、保健室に来ていただけませんか？」

里見先生は俯いたままで言います。麻莉乃先生はまさかそんな事を言われるとは思っていなかったので、

「ええ、いいですよ。今空き時間ですから、伺いましょうか？」

「え、あ、そうですか、ではお待ちしています」

里見先生は逃げるように職員室を出て行ってしまいました。

「どうしたんでしょね、里見先生？」

これ幸いと麻莉乃先生に話しかける新之助先生です。

「そうですね。訊いてみます」

麻莉乃先生は新之助先生の気持ちに気づくどころか、新之助先生を煙たがっていますので、すぐに席を立ち、職員室を出てしまいました。

「ああ……」

二の句がつげない新之助先生です。

蘭は教室に戻り、席に着くと思わずほくそ笑みます。

（麻莉乃先生、貴女の思い通りにはさせないわ）

蘭はすでに悪い魔女のようです。麻莉乃先生といい勝負くらい悪女の素質十分です。

「蘭ちゃん、大丈夫？」

彩乃が心配そうな顔で声をかけて来ました。

「え、何が？」

蘭は彩乃の言葉の意味がわかりません。

「だって、小次郎君が、蘭ちゃんがお腹を壊して保健室に行ってたって言うから」

彩乃は目を潤ませて言います。

「ええ！？」

蘭は小次郎に見られていたのに気づきます。

「ああ、別に具合が悪かったんじゃないのよ。里見先生って、ファッショナブルだから、服をどこで買っているのか訊きに行っただけなの」

蘭は咄嗟に嘘を吐き、その場をやり過ごそうと思いました。すると彩乃は、ああという顔をし、

「ごめんね、蘭ちゃん。女の子がお腹を壊したなんてあまり知られたくないよね」

と小声で謝りました。蘭は呆れてしまいました。

（そんな風に解釈されたのなら、もうそれでいいか……）

苦笑いして応じる蘭です。

一方、亜梨沙はそれどころではありません。

（麻莉乃先生、トムにまた私の事を話すのかな？　それはもうやめて欲しい……）

授業態度が良くないのを手紙で知らされた父の龍之介は、別に亜梨沙には何も言わないウルトラ親バカですが、亜梨沙はトーマスにそれを知られた方がショックだったのです。

（ああ。麻莉乃先生め！）

頭を抱えてしまう亜梨沙です。

その頃、麻莉乃先生は保健室にいました。

「ささ、紅茶でもどうぞ」

里見先生はニコニコしながら高級そうなカップに入った紅茶を麻莉乃先生に出しました。

「ありがとうございます」

麻莉乃先生はそれを目の前のテーブルに置きます。

「あの、ご用は何でしょうか？」

麻莉乃先生は時間を気にしながら尋ねました。

「取り敢えず、紅茶を飲んでお寛ぎください」

里見先生は麻莉乃先生と目を合わさずに言います。

（この人、私が嫌いで目を合わせてくれないのかと思っていたんだけど……。毒でも入っているのかしら？）

麻莉乃先生は、里見先生が目を見て話さないのに気づいていました。

ですから、嫌われていると思っていたのです。だからこそ、しきりに紅茶を勧めるのが不気味なのです。

「毒なんて入っていませんから、どうぞ」

まるで麻莉乃先生の心を見透かすかのように里見先生が言いました。

「あ、はい、ありがとうございます」

麻莉乃先生はギクッとしました。

（そこまで言われて飲まなかったら、さすがに失礼だわ）

麻莉乃先生はニコッとして紅茶を飲みました。

その時、里見先生が微かにニヤッとしたのに気づかなかった麻莉乃先生です。

「くう」

途端にカップを落とし、眠りこけてしまいます。

里見先生は悪い魔女のような顔になりました。

（貴女は私のものなの、麻莉乃先生。汚らわしい男と付き合うなんて許さない）

どうやら、里見先生は百合族のようです。

亜梨沙は憂鬱な顔をして帰宅しました。

「お帰りなさいませ、お嬢様。お弁当、如何でしたか？」

トーマスが玄関で出迎えてくれても、

「ああ、とても美味しかったわ」

低いテンションの亜梨沙です。トーマスに重箱の入った金の刺繍入りの風呂敷を差し出します。

「そのうちに坂野上先生がいらっしゃるから、接客をお願いね、トム」

せめて麻莉乃先生がトーマスにメロメロになって帰るのを見て溜飲を下げようと思う亜梨沙です。

「畏（かしこ）まりました、お嬢様」

トーマスは恭しくお辞儀をしました。

それを見てしまったメイド三人が失神しました。

遡る事数時間前。

里見先生は学年主任の先生に携帯で連絡し、麻莉乃先生が保健室で倒れたと言いました。

「軽い貧血でしょうから、安静にしていれば大丈夫です」

里見先生はニヤリとして伝えました。そして、ドアをロックしてしまいます。

「さあ、麻莉乃先生、楽しみましょう」

里見先生はそう言ってベッドに寝かせた麻莉乃先生の服を脱がせます。

「奇麗です、麻莉乃先生」

里見先生はウットリした顔で眠ったままの麻莉乃先生に囁きました。

麻莉乃先生が里見先生の「毒牙」にかかっていたとは思いもしない亜梨沙は、ドキドキしながら麻莉乃先生の訪問を玄関のロビーで待っていました。

（メイドではなくてトムに出迎えさせて、一撃で倒す。それでもダ

メなら、十二神将を……）

麻莉乃先生を猛獣扱いの亜梨沙です。

しかし、日が暮れ、すっかり暗くなっても、麻莉乃先生は来ませんでした。

「どうしたのかしら？」

亜梨沙は玄関から門まで行き、辺りを見渡しましたが、麻莉乃先生の姿はありませんでした。

（からかわれたの？）

ホッとしながらもそれはそれでムカつく亜梨沙です。

「坂野上先生はお出でにならないようですね、お嬢様」

トーマスがいきなり後ろに現れて言いました。

「きゃっ！　脅かさないでよ、トム！」

亜梨沙はムッとしてトーマスを見上げます。

「申し訳ありません、お嬢様」

トーマスは青白い月をバックにして亜梨沙に頭を下げました。

危うく失神しそうになる亜梨沙です。そして、

「他の女性に優しくしたら許さないんだから！」

とまた意味不明な事を叫び、走り去りました。

「畏まりました、お嬢様」

トーマスはもう一度優雅にお辞儀をします。

それを見て、庭師の一人が失神しました。彼もあちらの方のようです。

あなたは無敵の執事でなくちゃいけないんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ　ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。でも胸は残念です。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも言えずにいます。

ところが、親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）には見抜かれてしまいました。

でも、亜梨沙はそれに気づいていません。

トーマスの眼力に只一人落ちなかった（あくまで亜梨沙視点）保健担当の里見美玲先生。

その里見先生は、男を汚らわしい生き物と考える百合族の人でした。

里見先生は、以前から思いを寄せていた坂野上麻莉乃(さかのうえ まりの)先生を保健室に呼び出し、睡眠薬入りの紅茶を飲ませ、眠らせました。

そしてベッドに運び、服を脱がせてしまいます。

「素敵です、麻莉乃先生。貴女は男なんかと関わってはいけない。私の恋人になってください」

里見先生は眠っている麻莉乃先生の大きな乳房を撫で始めます。

それはまるで大きな水風船のような感じにポヨヨンとします。

「うん……」

麻莉乃先生が呻きました。里見先生はビクッとして手を止めます。

「気がついたんじゃないわね」

里見先生はホッとして微笑みました。

「奇麗です、麻莉乃先生」

里見先生は麻莉乃先生の唇に吸いつきます。

貪るように麻莉乃先生の唇にキスをし、やがて舌を口の中に入れて行きました。

「麻莉乃先生……」

麻莉乃先生も誰かとキスする夢でも見てしまっているのか、里見

先生の舌に自分の舌を絡ませて来ました。

「ああ……」

里見先生は麻莉乃先生の胸を撫でながらキスをしているうちに気持ちが高ぶって来たようです。

「麻莉乃先生」

彼女は麻莉乃先生のピンクのパンツも脱がせ、その下から現れた同じくピンクのパンティを脱がします。

「麻莉乃先生！」

里見先生は自分も服を脱ぎ始めます。豊満な乳房を揺らし、彼女は再び麻莉乃先生の唇を貪りました。

その時です。

ドアがノックされました。里見先生はピクンとして服を着て、麻莉乃先生に布団をかけます。

「はい」

ドアのすりガラスの向こうに見える人影に応じます。

「すみません、里見先生、坂野上先生はいらっしゃいますか？」

美津瑠木新之助（みつるぎしんのすけ）先生でした。

「はい、いますけど、まだ休んでおられます。どうなさいましたか、美津瑠木先生？」

里見先生は服と髪の乱れを直しながら立ち上がり、ベッドの周囲をカーテンで囲みます。

「坂野上先生が担任のクラスの有栖川から電話があって、先生がいらっしゃるという話だったが、まだお見えにならないと言われたんです」

里見先生は舌打ちしました。

（有栖川亜梨沙、余計な事を…）

「里見先生？」

新之助先生は中に入ろうとしてドアを開こうとしましたが、中からロックされているので開きません。

「あれ？　鍵かけてるんですか、里見先生？　開けて下さいよ」

ガタガタとドアを揺らす新之助先生の行動に驚いた里見先生はクイッとチェリーピンクの楕円形の眼鏡を上げ、

「今開けます！」

と怒鳴り、ドアに駆け寄ってロックを解除しました。

「麻莉乃先生は？」

奥を覗き込む新之助先生を里見先生は遮るように立ち、

「まだ安静にしてもらっています。有栖川さんには、今日は坂野上先生は行けないとお伝えください」

「え、いや、あの……」

新之助先生は里見先生に押されて保健室を出ました。

（里見先生、いい匂いがした。それによく見ると可愛い……）

麻莉乃先生一筋が更に揺らぐ新之助先生は、ボンヤリしたまま職員室に戻りました。

「ああ、男に触れてしまった！」

里見先生は悲鳴に近い声で言うと、部屋の奥にあるシンクで消毒液を使って手を洗います。

「しかもあんな男を触ってしまった！　あー、嫌だ」

里見先生はまさに皮膚をこそぎ取るのかというくらいの勢いで手を洗いました。

その目は危険を孕（はら）んでいるようにギラギラしています。

「さあ、もう一度楽しみましょう、麻莉乃先生」

里見先生は殺菌消毒したタオルで手を拭うと、麻莉乃先生に近づきました。

「あれ、私……？」

その声にギクッとして立ち止まります。そして気持ちを落ち着かせるために深呼吸をします。

「気がつきましたか、坂野上先生？」

里見先生は微笑んでカーテンを開き、麻莉乃先生に言いました。

「あ、里見先生。私、どうしたんですか？」

麻莉乃先生は自分の服が脱げているのに気づいたのです。

「すみません、私が脱がしました。坂野上先生が苦しそうにしていらっしゃったので」

また麻莉乃先生と目が合わせられない里見先生です。

「え、でも私、その、ブラも、えと、パンティもですね……」

麻莉乃先生は顔を赤らめて布団の中を覗き込んでいます。

里見先生は誤魔化し切れないと思い、

「ごめんなさい、麻莉乃先生！　私が脱がせました。貴女の事が好きだから！」

と顔を真っ赤にして言いました。

「え？」

麻莉乃先生はキョトンとします。

もし、新之助先生が言ったのであれば、すぐに園長に連絡して解雇してもらうところですが、相手は女性の先生です。

麻莉乃先生はそういう方々がいるのを知らないほどウブでも若くもありませんが、さすがに現実に目の前に現れると驚いてしまいました。

（もしかして、有栖川さんのところの執事さんとキスしていると思ったのは、まさか……）

嫌な汗が出て来る麻莉乃先生です。

やはり、麻莉乃先生は夢でキスしていました。それも亜梨沙の邸の執事のトーマスとでした。

（夢なら覚めないで、と思ったら、やっぱり夢だったのね……）

トーマスとのキスが夢だったばかりか、その相手が女性だったのは、更にショックです。

「麻莉乃先生、私、真剣なんです！　ですから……」

里見先生がすがるような目で言いますが、麻莉乃先生が見ると目を背けます。

「里見先生、今回の事は誰にも言いません」

麻莉乃先生は服を着ながら言います。

「はい……」

里見先生はさっきまでの魔女っぷりはどこへ行ったのか、借りて来た猫より大人しくなっています。

「でも、今後、このような事があったら、その時は学年主任の先生に言いますから」

麻莉乃先生はベッドから出てパンティを履き直しました。

それをチラチラ横目で見る里見先生です。

「それに、私は男の人とお付き合いしたいのです。申し訳ありませんが、里見先生のご意向にはお答えできませんので」

麻莉乃先生は乱れたマッシュショートヘアを直すと、保健室を出て行ってしまいました。

「……」

里見先生は項垂れて、ベッドに倒れこみました。

一方、新之助先生から、麻莉乃先生が倒れたので今日は行けないと告げられた亜梨沙は複雑です。

（喜んじゃいけないよね）

亜梨沙は携帯を切りながら思いました。

「坂野上先生はどうされたのでしょう？」

亜梨沙の背後に立ったトーマスが言いました。またビクッとする亜梨沙です。

「脅かさないでよ、トム！」

トーマスと話せるのが嬉しい亜梨沙ですが、距離が近いのでドキドキしています。

「申し訳ありません、お嬢様」

トーマスは深々と頭を下げます。亜梨沙はそれをドキッとして見ましたが、通りかかったメイド二人が仲良く失神しました。

三年で学年トップの成績を維持し続けている錦織瑞穂（にしきおりみずほ）。

黒縁眼鏡でおかっぱ頭の地味な生徒ですが、新之助先生に恋しています。

その新之助先生が保健室に向かったので、

（まさか、里見先生と？）

瑞穂は妙な妄想をして赤面しながら、こっそり新之助先生をつけました。

保健室の中から新之助先生が里見先生に押し出されるのを見てしまった瑞穂は、新之助先生が里見先生に迫って追い出されたと勘違いしてしまいます。

新之助先生は肩を竦めて廊下を歩いて行きました。

（不潔よ、新之助先生）

そう思いながらも、瑞穂の恋心は消えません。

（新之助先生、私に気づいて！）

思うだけで通じるのなら、誰も苦労はしません。もどかしくなる瑞穂です。

「何してるのさ、錦織、こんなとこで？」

不意に背後から声をかけられ、ビクッとする瑞穂です。

振り返ると、七三分けが決まり過ぎている容貌の男子が立っています。

学年トップの成績を瑞穂と争っている寺泉学（てらいずみまなぶ）です。

「何しててもいいでしょ。貴女には関係ないわ、寺泉君」

瑞穂は顔を赤らめながら、走り去ってしまいました。

（今日は塾のはずなのに、何でこんな時間にここにいるんだ、あいつ？　でも、可愛いから許す）

学は実は瑞穂が好きなのです。でもそれを言えず、成績のライバルとしてしか接する事ができないヘタレです。

その上、自分も瑞穂と同じ塾に通っているのに瑞穂の事を心配しているとは、相当重症です。

「まさか、あの筋肉バカ（注：新之助先生の事）が……」

そんな事を思っていると、保健室から麻莉乃先生が顔を赤らめて飛び出して来ました。

思わず柱の陰に隠れる学です。

（な、何だ？）

学は、新之助先生が保健室から追い出されるのを見ていましたが、里見先生を見ていません。

彼の頭の中で、新之助先生と麻莉乃先生のいけない関係の図が浮かびます。

「うう……」

思わず鼻血を垂らしかけてしまう学です。

有栖川邸から数ｋｍ離れたところにある桜小路邸。

その敷地は有栖川邸に匹敵します。

邸の一角にある蘭の部屋です。高等部の職員室がすっぽり入るくらいの広さです。

「は、はい、ルル、こっちにおいで」

蘭はローズピンク地に一本の白のサイドラインが入った高等部指定のジャージを着て、顔を引きつらせています。

彼女の前には、一匹の長くて白い毛のチワワがいます。頭に着けられた真っ赤なリボンがユラユラしています。

チワワは蘭を警戒しているのか、グルルと唸り声を上げて近づこうとしません。

「ああん、どうしてそんなに唸るのよ、ルル？　私は貴女と仲良くしたいのよ？」

泣きそうな顔で言う蘭です。

（亜梨沙の邸のいるドーベルマンに対抗できるようにならないと、トーマスには近づけない）

そう思った蘭は、決死の覚悟で苦手な犬を飼う事にしました。

でも、チワワが精一杯でした。それでも怖い蘭は、逆にルルを警

戒させてしまったのです。

「ルルゥ……」

ビーフジャーキーを片手に持ち、愛想笑いをしてルルを呼ぶ蘭ですが、ルルはソッポを向いてしまいます。

「はあ……」

蘭は項垂れてしまいました。

「トーマスは遠い……」

彼女は天蓋付きのベッドに倒れこみ、ビーフジャーキーを放り出します。

「ワン！」

ルルは投げ出されたビーフジャーキーに駆け寄り、食べ始めました。

そして翌日の朝です。

「では、行って来る」

龍之介はいつものように会社に出勤です。

メイド十人、庭師五人、コック三人、警備員二十人が龍之介を見

送ります。

そしてトーマスも見送ります。メイド達は龍之介に顔だけ向けてトーマスに目を向けています。

警備員と庭師の一人も目をトーマスに向けています。

「行ってらっしゃい、パパ」

亜梨沙はまだトーマスを気にしているので、ぶつかるようなキスをしてしまいます。

「いい子にしてるんだぞ、亜梨沙」

先日の麻莉乃先生の手紙を読んで、龍之介は少しだけ亜梨沙に注意をしようと思って言いました。

「いい子にって、私はいつもいい子よ、パパ！」

メイド達がクスクス笑うので、亜梨沙は赤面して言い返します。

「ははは、そうだったね」

龍之介は微笑んでリムジンに乗り込みました。

「行ってらっしゃいませ、旦那様」

走り出すリムジンに頭を下げるトーマス達です。

「じゃ、私も出かけるね」

亜梨沙はそう言うと、車寄せから歩き出します。

「行ってらっしゃいませ、お嬢様」

トーマスが深々とお辞儀をします。

メイド達全員と警備員と庭師一人が倒れました。

「行って来ます！」

亜梨沙はパンチラしながら庭を駆け出しました。

「お嬢様、落とし物です」

トーマスが亜梨沙を追いかけて来ました。

亜梨沙はそれに気づき、更に速く走ります。

どうしようもないツンデレです。その上クマさんパンツ丸見えです。

「お嬢様」

亜梨沙はいつの間にかトーマスの声が前から聞こえるので驚いて顔を上げました。

「きゃっ！」

止まるのが遅れて、トーマスにぶつかってしまう亜梨沙です。

「大丈夫ですか、お嬢様？　お怪我はありませんか？」

ぶつかったまま動かない亜梨沙を心配して、トーマスが声をかけます。

「は！」

亜梨沙はトーマスに抱きついてしまった事に気づき、茹蛸（ゆでだこ）も逃げ出すほど赤くなりました。

顔が破裂しそうです。

「お嬢様、ハンカチを落とされましたよ」

トーマスはキラッと白い歯を見せて微笑みます。亜梨沙は意識が遠のきかけました。

「あなたは無敵の執事でなくちゃいけないんだから！」

亜梨沙はまたしても意味不明の事を叫び、トーマスが差し出したハンカチをバッと取ると、門に向かって走ります。

「ありがとうございます、お嬢様」

トーマスは恭（うやうや）しくお辞儀をしました。

それを見て、ようやく気がついたメイド達と警備員と庭師がまた倒れました。

あなたは無敵の執事でなくちゃいけないんだから！（後書き）

お読みくださり、多謝です。

次回こそ、麻莉乃先生ＶＳ十二神将です。多分……。

あなたは何が何でも一番なんだから！（前書き）

また長くなってしまいました。お許しを（汗）。

あなたは何が何でも一番なんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ　ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。でも胸が小さいのを気にしています。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも言えずにいます。

ところが、親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）には見抜かれてしまいました。

でも、亜梨沙はそれに気づいていません。

亜梨沙はいつものように父の龍之介に激突するような行ってらっしゃいのキスをしてから、パンチラさせながら走っていました。

今日はイチゴパンツです。

（今日は何も落とし物はしてないんだから！）

昨日、トーマスに追いかけられて、その上いつの間にか前にいた彼に思い切り抱きついてしまった事を思い出し、ホールトマトも謝るくらい赤くなる亜梨沙です。

「行ってらっしゃいませ、お嬢様」

遠くでトーマスの声が聞こえますが、亜梨沙は聞こえないフリをしてそのまま全力疾走です。

更にそのまま失踪したいくらい恥ずかしいと思う亜梨沙です。

（トム……）

昨日はトーマスの温もりが残っていて、一日中ボンヤリしていた亜梨沙は、何故か凄く機嫌が悪い坂野上麻莉乃（さかのうえまりの）先生に集中攻撃を受けました。

居残りをさせられた上、校庭を三周させられました。

（どうしてあんな目に……）

その事があったので、今日はトーマスと一言も会話をかわしていない亜梨沙なのです。

教室に着くと、

「おはよう、有栖川」

恒例の早乙女小次郎のセクハラタイムです。

後ろからムンズと胸を揉まれます。

「ああ、おはよう、早乙女君」

亜梨沙は力なく微笑んで挨拶を返し、唖然として胸から手を放した小次郎から離れて席に着きます。

（どうしたんだ、有栖川？　何があった？）

いつもの切れのある亜梨沙の反撃を期待（？）していた小次郎はすっかり拍子抜けです。

「おはよう、小次郎」

そこへ高司譲児の声が聞こえました。

「おう、おはよう、譲児」

小次郎は声が聞こえた方を見ましたが、そこには金髪碧眼の美少年が立っていました。

見覚えがない顔です。しかし、着ている服は高等部の制服なので、ここの生徒のようです。

「君、誰？」

小次郎はキョトンとして尋ねます。

周囲にいた女子達がざわつき、きゃあきゃあと小さい悲鳴が上がり始めます。

「俺だよ、小次郎」

その美少年はニコッとして言いました。それを見て何人かの女子が失神しました。

「ええ！？」

小次郎は仰天しました。出っ歯が全部発射されそうです。

「じょ、譲児？」

小次郎は目を見開いてその美少年を見上げました。

「そうだよ」

また譲児はニコッとしました。

「きゃああ！」

クラスの女子達があっと言う間に譲児を取り囲みます。

「付き合ってください」

突然交際を申し込む素っ頓狂な女子もいます。

「何？」

それどころではない亜梨沙は、ボンヤリしたままで譲児のほうを見ます。

でも、何も感じません。

亜梨沙にとって、金髪碧眼はトーマス以外はゴミ同然なのです（あくまで亜梨沙視点）。

「譲児君、イメチェンしたんだ。雰囲気変わったね」

ジョニデ命の桃之木彩乃（ももののき あやの）も、全く興味がないようです。

「ああ、高司君なんだ、あの人」

亜梨沙は金髪の美少年が誰なのかすら認識していませんでした。

そしてもう一人、譲児に興味がない人物がいました。

譲児がマジ狙いの女子である桜小路蘭です。

（一瞬だけど、亜梨沙の邸の執事さんかと思ってびっくりした）

でも、トーマスではないとわかると、蘭の興味は一気に失われました。

イメチェンの甲斐がない譲児です。

「ほら、皆さん、もうホームルームの時間ですよ」

未だに機嫌が悪い麻莉乃先生が入って来ました。

（え？）

麻莉乃先生も譲児のイメチェンにビクッとしました。

（バトラーさんがいるのかと思った）

麻莉乃先生はそれが譲児だとわかり、ホッとします。

「ほら、静かにしなさい」

麻莉乃先生がもう一度注意しなければならないほど、女子達は譲児に目を奪われていました。

（全く、金髪なら誰でもいいの、貴方達は？）

麻莉乃先生はムッとしました。

（高司君もイケメンだけど、やっぱりバトラーさんには及ばないわ）

まるでトーマスの彼女気取りの麻莉乃先生です。何故か誇らしそうなのが怖いです。

譲児も、蘭が全然自分に興味がないのに気づき、悲しそうに蘭の後ろ姿を見ています。

（それほど有栖川の邸の執事は凄いのか？）

譲児はトーマスを遠くからしか見た事がないので、一度会いに行こうと思い立ちました。

（できる事なら、あの人を超えたい。そして、蘭さんに真剣に交際を申し込む）

今までの方法では蘭を落とせないと思った譲児は、最悪の場合、トーマスに弟子入りする覚悟です。

ちょっと方向性がおかしくなっています。

ホームルームが終わり、一時限目は理科実習なので、教室移動です。

準備をして立ち上がった亜梨沙に譲児が近づきました。

殺気立つ小次郎とその他の男子達、ビクッとする女子達です。

亜梨沙は何度も言うようですが、美少女です。

彼女はセクハラ魔神の小次郎以外の男子とは普通に会話します。

明るくて可愛い亜梨沙は人気者なのです。でも魔法使いではありません。

クラスの中の男子の多くが、できれば亜梨沙と付き合いたいと熱望しています。

中には父親の遺産目当てという欲に塗れた男子もいますが。

そして幾人かが「貧乳至上主義者」との噂もあります。

「有栖川、ちょっと話があるんだけど」

譲児が言いました。女子の中には泣き出す子もいます。

男子の中にも泣き出すバカがいました。

小次郎は、

（譲児は桜小路一筋だって言ってた。だから、告白はあり得ない）

と思っていますが、相手が譲児だけに（しかも金髪碧眼）不安要素満載です。

「何、高司君？」

亜梨沙は決して小次郎には見せないような笑顔で応じました。

血の涙が湧き上がって来る小次郎です。

（有栖川ァ、俺にもその笑顔ちょうだい……）

蘭はその様子をチラッと見ましたが、気にも留めずに教室を出て行きます。

「蘭ちゃん、譲児君が亜梨沙ちゃんに告白しそうな感じだよ。どうする？」

勘違い街道を走り始めた天然暴走娘の彩乃が蘭を追いかけて来て言いました。

「別にいいんじゃない。私は関係ないし」

蘭はニコッとして応じました。

「もう、蘭ちゃんたら、素直じゃないんだから」

彩乃の中では、蘭が譲児にメロメロですから、蘭の態度は強がりにしか見えません。

「私は素直よ」

蘭はスタスタと廊下を歩いて行きました。

「もう」

彩乃はプウッと頬を膨らませ、蘭を追いかけます。

一方、譲児は亜梨沙の前に立ち、

「今日、有栖川の家に行ってもいいかな？」

「え？」

意外な申し出に亜梨沙はキョトンとします。

亜梨沙の中では、譲児はあくまでもクラスの中の仲がいい男子で

しかなく、恋愛対象ではありません。

そして何より、譲児が蘭にアタックしているのを知っていますから、自分に告白する事はあり得ないと思っています。

（所詮、男共は巨乳が好きなのよ）

亜梨沙の被害妄想が湧き上がります。

そして更に妄想は進みました。

（まさか、高司君、トムに告白？）

いけない世界を妄想し、顔が赤くなる亜梨沙です。ＢＬ漫画の読み過ぎです。

（ああ、有栖川が恥ずかしがっている！）

亜梨沙の表情の細かいところまで見逃さない亜梨沙マニア特等席の小次郎です。

「執事さんに会って話がしたいんだけど」

更に誤解を招くような事を言い出す譲児です。

（わわ、高司君、本当にトムに告白するの？）

妄想が暴走し、ますます顔が火照る亜梨沙です。

「そ、そうなんだ。いいよ、トムに伝えとくから」

亜梨沙は譲児を見上げて答えました。譲児は赤い顔をして自分を上目遣いに見ている亜梨沙にドキッとします。

（有栖川も可愛いんだけど、やっぱり俺は蘭（きょにゅう）さんがいい）

巨乳至上主義の譲児はそう思いながら、

「わかった。ありがとう、有栖川」

と言うと、教室を出て行きました。

顛末を見ていた一同は事情はそれぞれ違いますが、一斉にホッとしました。

それに対して、不安が募る亜梨沙です。

（高司君、トムと何を話すのかしら？）

またいけない世界を思い描きそうになり、振り払う亜梨沙です。

（トムはそんな人じゃない）

トムは違うが、譲児はそうかも知れないと酷い判定を下す亜梨沙です。

職員室に向かって廊下を歩いている麻莉乃先生は、その先に里見（さとみ）美玲（みれい）先生が立っているのに気づきました。

「あ……」

里見先生は麻莉乃先生に駆け寄って来ました。

（まさか……）

思わず身構える麻莉乃先生ですが、里見先生は麻莉乃先生の前に来ると、

「昨日は大変申し訳ありませんでした」

と腰が折れるかと思うくらい頭を下げました。

「ああ、いえ、その、もういいですよ、里見先生。私、むしろ忘れたいので、謝らないでください」

麻莉乃先生は昨日の里見先生の「色仕掛け」を思い出し、赤面しています。

「私、坂野上先生のお気持ちを少しも考えないで、酷い事をしてしまいました」

里見先生は涙ぐんでいます。麻莉乃先生は困り顔になり、

「もういいんです。では、失礼します」

麻莉乃先生は里見先生の横をすり抜けて、廊下を歩いて行きました。

「麻莉乃先生……。やっぱり素敵……」

諦めきれない里見先生です。目をウルウルさせています。

「坂野上先生、お加減は如何(いかが)ですか？」

麻莉乃先生が職員室に入ると、美津瑠木新之助(みつるぎしんのすけ)先生が近づいて来ました。

「は？」

麻莉乃先生は、里見先生の謀略で自分が倒れた事にされていたのを知りません。

ですから、学年主任の先生や他の先生方に身体の具合を尋ねられて、うんざりしていたのです。

（只でさえうざいこの人に言われると、余計うざい）

麻莉乃先生はそう思いましたが、そんな事は全然顔に出さず、営業スマイル全開で、

「はい、お陰様で。お気遣いいただき、ありがとうございます」

と言うと、サッサと新之助先生から離れてしまいました。

「ああ……」

折角話す切っ掛けができたと思ったのに、つれない麻莉乃先生に唖然とする新之助先生です。

（もう、美津瑠木先生ったら、麻莉乃先生にデレデレして……）

他の用事で職員室に来ていた三年生の錦織瑞穂（にしきおりみずほ）はムッとしていました。

（やっぱり、男の人って、胸が大きい人が好きなのかしら？）

瑞穂は亜梨沙に比べれば胸はあるのですが、麻莉乃先生と比べてしまうと、悲しくなってしまうようです。

「錦織」

廊下に出たところで、クラスメートで成績トップを争っている寺泉学（いずまなぶ）に声をかけられ、瑞穂はビクッとしました。

（寺泉君も麻莉乃先生狙い？）

自分が麻莉乃先生を睨んでいると、いつも現れる学に妙な疑惑を抱く瑞穂です。

彼女は学に好かれているとは夢にも思っていません。

瑞穂にとって、学は勉強のライバルでしかないのです。

学が知ったら、寝込んでしまいそうな事実です。

「何かご用、寺泉君？」

瑞穂は黒縁眼鏡をクイッと上げて尋ねます。その仕草にドキッとした学はつい赤面してしまいます。

（可愛い、錦織……）

もう只のアホ男子です。

「用がないのに呼び止めないでよね」

そんな学の気持ちなどミジンコほども感じ取っていない瑞穂は、無情な言葉を投下して立ち去ります。

「ああ……」

今度の日曜日、一緒に映画でも、と誘おうとした学は、ジャケットのポケットの中にある前売り券をギュウッと握りしめました。

（俺は何て臆病者なんだ……）

項垂れる学です。

そんな二人のやりとりを廊下の角から里見先生が見ていました。

何故かニヤリとする里見先生です。血の雨が降りそうで怖いです。

放課後です。

今日はスチャラカをしなかった亜梨沙は、居残りも校庭ランニングもなしで、無事帰れます。

玄関まで来て、ハッとする亜梨沙です。

（そうだ、トムに連絡しておこう）

譲児がトーマスに会いに行くのを口実にトーマスと話そうと考える亜梨沙です。

（わ、私が話したい訳じゃないんだから！）

自分に言い訳するとは、トーマス好き好き症候群の末期です。

携帯で家にかけると、メイドが出ました。

「トムをお願い」

お嬢様のオーラ全開で言う亜梨沙です。

「お待ちください」

保留の音楽を聞いているうちにドキドキして来る亜梨沙です。

「お待たせ致しました、お嬢様。如何なさいましたか？」

声だけなら大丈夫だと油断していた亜梨沙でしたが、もう少しで倒れるところでした。

（声だけでも素敵過ぎるわ、トムゥ！）

心の中で絶叫する亜梨沙です。

「えーと、私のクラスの男子が、トムとお話がしたいんですって。だから、お願いね」

「畏(かしこ)まりました、お嬢様」

亜梨沙は通話を切り、破裂しそうな胸を押さえます。

「ほらほら、そんなに強く押さえつけたら、ない胸がもっとなくなるぞ、有栖川」

小次郎が譲児と共に現れて言葉のセクハラです。

「大きなお世話よ！」

亜梨沙は小次郎を鬼の形相で睨みつけてから、

「高司君、トムには連絡しておいたから、一緒に行きましょ」

全然別人のような天使の笑顔で譲児に言う亜梨沙です。

「ありがとう、有栖川」

小次郎はその笑顔を見て愕然とし、譲児は亜梨沙の変わりように驚きました。

「ああ、亜梨沙ちゃん、公然と浮気？」

彩乃が後ろから現れて言うのを亜梨沙は無視して、譲児と校庭を歩いて行きます。

「蘭ちゃん、いいの？」

彩乃は後から玄関に来た蘭に言います。蘭は肩を竦めて、

「別にいいんじゃない？　私は関係ないし」

「ええ？」

彩乃は妄想ワールドが崩壊しそうなので混乱しました。

小次郎は並んで歩く譲児と亜梨沙を見て固まったままです。

亜梨沙達が知らないところで、事態は急展開しようとしていました。

麻莉乃先生が亜梨沙達より早く、有栖川邸を訪れていたのです。

警備員はすでに麻莉乃先生信者なので、顔パスです。

（今日こそ、私の魅力で……）

悪い魔女の顔になる麻莉乃先生です。

「バトラーさんはどちらに？」

麻莉乃先生は玄関の前を掃除していたメイドの一人に尋ねました。

「庭園におりますが、行かれない方が……」

メイドがそう言った時には、麻莉乃先生はすでに庭園に行ってしまった後でした。

庭園には、亜梨沙の命令しか聞かないはずですが、トーマスには服従しているドーベルマン十二頭（雌）がいます。

よその人間が無断で庭園に侵入したら、確実に彼女達に狩られます。

麻莉乃先生は三十路にならずにその命を落としてしまうのでしょうか？

「バトラーさん、どちらですか？」

麻莉乃先生はこれ以上できないというくらいの笑顔で言いました。

その時です。

「ガルル！」

侵入者を嗅ぎつけて、十二神将（ドーベルマン）が走って来ました。

「え？」

麻莉乃先生はドーベルマンに気づき、一瞬死を覚悟しましたが、

「負けません！」

と闘気を発しました。十二神将どころか、四天王も逃げ出しそうな勢いです。

「きゃん、きゃん！」

十二神将達は、麻莉乃先生が発する闘気とその鬼の形相に仰天し、逃走しました。

麻莉乃先生の勝ちです。

「どうした、お前達？」

そこへトーマスの声が聞こえました。

「バトラーさん！」

麻莉乃先生はまた笑顔になり、トーマスの声がした方に行きました。

「いらっしゃいませ、坂野上先生」

庭園の奥から姿を見せたトーマスは、ブルージーンズのオーバーオールに白のTシャツを着ていました。顔は土いじりをしていたのか、汚れています。

それに反して、キラッと輝く白い歯は健在でした。

「ああ、反則です、バトラーさん……」

麻莉乃先生はあまりに意外なトーマスの「不意打ち」に撃沈し、気絶してしまいます。

「坂野上先生」

トーマスはサッと麻莉乃先生を抱き止めました。

トーマスが麻莉乃先生を客間のベッドに寝かせて退室した時、亜梨沙と譲児が到着しました。

「あら、どうしたの、トーマス？」

亜梨沙はトーマスが燕尾服以外を着ているのを初めて見ました。

クラッと来てしまいそうです。

「坂野上先生がいらっしゃいまして、お気を失われまして……」

トーマスが説明すると、亜梨沙は、

（あの隠れ巨乳、何しに来たのよ？）

亜梨沙は麻莉乃先生の事が気になりましたが、

「あ、こちらがクラスメートの高司譲児君よ」

と譲児を紹介しました。

「こんにちは、バトラーさん」

譲児は微笑んで挨拶しました。トーマスもニコッとして、

「いらっしゃいませ、高司様」

と応じます。

（うわ、凄い、これ……）

間に挟まれていた亜梨沙は、トーマスと譲児の超絶的な笑顔に気絶しそうです。

（高司君もかっこいいのね……）

そこで初めて気づく鈍感な亜梨沙です。

「どうぞこちらへ」

トーマスは譲児を応接間に案内しました。

「お茶をお持ち致しますので、お待ちください」

トーマスは譲児を残して退室します。そして、部屋の前にいた亜梨沙に、

「素敵なクラスメートの方ですね、お嬢様」

と言いました。亜梨沙はその言葉で完全にテンパってしまいました。

「あなたは何が何でも一番なんだから！」

また意味不明な事を言って走り去る亜梨沙です。

「ありがとうございます、お嬢様」

トーマスは優雅にお辞儀をしました。通りがかったメイド二人が気絶したのは言うまでもありません。

あなたは何が何でも一番なんだから！（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

次回はトーマスと譲児の話から始まります。

あの子にドキッとしたからって、別にあなたに言い訳するつもりはないんだから

前回の続きから始まります。

あの子にドキッとしたからって、別にあなたに言い訳するつもりはないんだから

有栖川亜梨沙(ありすがわありさ)は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。でも胸が小さいのを気にしています。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼(へきがん)。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも言えずにいます。

ところが、親友の桜小路蘭(さくらこうじらん)には見抜かれてしまいました。

でも、亜梨沙はそれに気づいていません。

クラスメートの高司譲児(たかつかさじょうじ)が、

「執事さんに会って話がしたいんだけど」

と言い、亜梨沙の邸にやって来ました。

トーマスと譲児の笑顔攻撃の間にいた亜梨沙は、もう少しで失神しそうになりました。

亜梨沙は譲児がトーマスにどんな話があるのかわかりませんが、どうしてもいけない妄想が始まってしまいます。

（まさか、まさか本当に高司君、トムに告白？）

頭が爆発しそうになる亜梨沙です。でも、何食わぬ顔で応接間に入る勇気はありません。

（どうすればいいの……？）

ドキドキしながら、亜梨沙は自分の部屋に向かいました。

（やっぱり凄く気になる！）

亜梨沙は部屋に入ると、制服を脱ぎ捨てました。

「げ」

ふと胸を見ると、心なしか小さくなった気がしてしまいます。

『ほらほら、そんなに強く押さえつけたら、ない胸がもっとなくなるぞ、有栖川』

セクハラ魔神の早乙女（さおとめ）小次郎（こじろう）に言われた言葉を思い起こし、落ち込む亜梨沙です。

でも、完全に気のせいです。

当事者のトーマスと譲児は、応接間のソファに向かい合って座っていました。

トーマスが淹れた紅茶の香りが部屋全体に広がっています。

「お話とは、どのような事でしょうか？」

トーマスはキラッと歯を光らせて譲児に尋ねます。

（これが学園中の女子を虜にした笑顔か。蘭さんもこの笑顔に……）

譲児には、亜梨沙が妄想したような趣味はありませんが、トーマスの笑顔には思わずいけない感情が芽生えそうです。

譲児は蘭を落とす前に自分がトーマスに落ちてしまっては元も子もないと思い、紅茶を一口飲んでから、

「実は、好きな子がいるのですが、その子が別の男性に夢中で、全然僕の事を見てくれないのです」

と単刀直入に切り出しました。

「そうなのですか」

またトーマスはニコッとします。

「貴方ほど眉目秀麗な方が、私如きにそのような悩み事をご相談になるとは、身に余る光栄です」

トーマスの言葉は、他の誰かが言ったら、確実に嫌味に聞こえるのでしょうが、譲児には最上の謙遜に聞こえました。

（さすが執事さんだ。言い回しの機微が卓越してる）

譲児は、変な意味ではなく、トーマスの事が好きになりました。

「そんな事はないですよ。実際にバトラーさんは、僕らの学園の女子達を虜にしているではないですか」

譲児は話を進めるためにそう言ってみました。トーマスが女子達の事をどう思っているのか、知りたかったからです。

「とんでもないです。そのような事はあり得ません」

トーマスは恥ずかしそうに言います。譲児は仰天しました。

（この人、全然自分の凄さに気づいていないのか！？）

無意識のうちに女性を虜にしているとしたら、トーマスから得るものはないと譲児は感じました。

（ダメだ。この人には勝てない。この人のこの雰囲気は、生まれ持ったものだ。俺には真似できる事ではない）

「それでも、私の方が年上ですから、何某（なにがし）かのアドバイスを差し上げられるかも知れません」

トーマスは真っ直ぐに譲児を見ました。譲児はもう少しで、
「好きになってもいいですか？」
と訊いてしまいそうです。
「どんな事でしょうか？」
譲児は身を乗り出して尋ねました。トーマスはまた微笑んで、
「自分を飾らない事。ありのままの自分を見せる事です」
ごく当たり前の事を言われ、譲児はドスンとソファに戻りました。
（やっぱりこの人は天然なんだ……）
トーマスは更に、
「気になるご婦人には、どうしても自分を飾って見せたくなるものです。しかし、ご婦人方はそのような男の小細工を簡単に見破ってしまいます」
譲児はギクッとしました。思い当たる事があるからです。
（俺はいつも、精一杯背伸びして、蘭さんに話しかけていた。それを蘭さんは全部見透かしていたのか？）
「これは私の経験ですから、高司様のケースに当てはまるかわかりませんが、お心に留めていただければ幸いです」

トーマスの言葉に譲児は我が身を振り返り、嫌な汗が出て来ました。

「高司様？」

トーマスは譲児が黙ったままなので、心配になったのか、声をかけました。

「あ、すみません、ボンヤリしていました」

譲児はハッと我に返り、苦笑いをして応じました。

そして立ち上がります。トーマスもそれに応じて立ち上がりました。

「ありがとうございました、バトラーさん。非常に参考になりました」

譲児はトーマスと握手を交わします。

「力になれたのでしたら、光栄です」

トーマスはギュッと譲児の手を握ります。譲児は思わず赤面しました。

「それから、私の事は、トムか、トーマスとお呼びください」

トーマスは微笑んで言いました。またしてももう少しで落ちそうになる譲児です。

「はい。では、僕の事も、譲児と呼んでください」

譲児も精一杯の笑顔で言いました。

（あ、これがいけないのか。自然体でないとな……）

反省する譲児です。

「畏(かしこ)まりました、譲児様」

トーマスは微笑んで応じました。

二人は応接間を出ました。トーマスが譲児を先導して玄関に向かっていると、意識を回復したのか、坂野上麻莉乃(さかのうえまりの)先生が客間から出て来ました。

「坂野上先生、お加減はもうよろしいのですか？」

トーマスが笑顔で近づきます。譲児はトーマスの立ち居振る舞いを見て、

（なるほど、トーマスさんにはまるで下心が感じられない。あくまでも紳士的だ）

と感心します。

「ああ、バトラーさん。まだ少しふらつきますの」

麻莉乃先生は明らかに急に具合が悪くなったようにトーマスにし

な垂れかかります。

「大丈夫ですか、坂野上先生？」

譲児が驚いて駆け寄りました。

「え、高司君？」

麻莉乃先生はその時ようやく譲児に気づき、慌ててトーマスから離れました。

（まずい……。今のはまずい……）

麻莉乃先生は焦りました。

（私の教員人生が……）

クビになって、場末のスナックで飲んだくれている姿まで妄想してしまいます。

それくらいでクビになるのなら、学園前でトーマスを誘惑した時点でクビになっているはずです。

「も、もう大丈夫ですから、バトラーさん。では、ご機嫌よう」

譲児の出現で、撤退を余儀なくされた麻莉乃先生は、逃げるように邸を出て行きました。

「お気をつけて」

トーマスはお辞儀をして言いました。

（麻莉乃先生、トーマスさんに迫るために来たのか。凄いな）

譲児は麻莉乃先生の執念を感じました。

「あら、譲児君、もう帰るの？」

私服に着替えた亜梨沙が戻って来ました。

ローズピンクと黒のボーダーのニット地のロングパーカーを着ています。

一応黒のデニム地のショートパンツを履いているのですが、パーカーの裾が長いので、何も履いていないようにも見えます。

譲児は思わずいつもはニーハイソックスに隠れている亜梨沙の生脚を見てしまいます。

「な、何、高司君？」

譲児がジッと自分を見ているので、ドキドキしてしまう亜梨沙です。

（ああ、ダメよ、譲児君、私はトム一筋なんだから……）

また妄想世界を開放する亜梨沙です。

「いやあ、有栖川の私服、初めて見たからさ。可愛いなと思って」

譲児は別に他意なくそう言いました。

「あ、ありがとう……」

亜梨沙はパプリカも逃げ出すほど赤くなって言いました。

（可愛いなんて、初めて言われた……）

亜梨沙は一応高等部の男子達の憧れの対象ですが、大富豪のお嬢様という大きな肩書きが邪魔して、今まで告白された事がありません。

当然の事ながら、男子と付き合った事もありません。

父龍之介は、亜梨沙には甘いのですが、男女関係には厳しく、亜梨沙に届いた男子からの手紙を悉く破り捨てていました。

その事も、亜梨沙が恋に不慣れで臆病になってしまった原因です。

ですから、面と向かって「可愛い」と言われた事はないのです。

同年代の男子には。

「じゃあ、帰るね。今日はありがとう」

譲児は亜梨沙の手を取って握手をして来ました。

ドキッとしてしまい、ハバネロも驚くくらい赤くなる亜梨沙です。

「う、うん、どう致しまして」

亜梨沙はそれだけ言うと、引きつり笑いをしました。

譲児は微笑んで見ていたトーマスに顔を向け、

「トーマスさん、今日はありがとうございました」

「いえ、こちらこそ、あまり力になれず、申し訳ありません」

トーマスと譲児の微笑み合戦にまた意識が遠のく亜梨沙です。

「ここでいいですから」

譲児は玄関を出たところで亜梨沙とトーマスに言いました。

「じゃあ、また明日な、有栖川」

譲児は亜梨沙に手を振って庭を歩いて行きました。

「うん」

亜梨沙は顔の火照りを感じながら、手を振り返しました。

譲児が門のところまで行った時、

「ねえ、トム」

気になったので、早速切り出す亜梨沙です。

「はい、お嬢様」

トーマスが亜梨沙を見ます。

（うわ、やっぱり高司君よりトムの方が……）

亜梨沙はこの数十分でもう死んでしまうそうなくらいイケメンパラダイスを体験しています。

「高司君と何を話したの？」

亜梨沙は堪え切れずにトーマスから視線を外して尋ねます。

「譲児様は、お好きなご婦人がいらっしゃるのだそうです。その事でお悩みのご様子でした」

トーマスは門の方を見て答えました。

「そうなんだ」

亜梨沙もトーマスと同じ方向を見ます。

（蘭の事ね）

「どんな悩み？」

亜梨沙はチラッとトーマスを見ましたが、トーマスが亜梨沙を見ているので、また視線を逸らします。

「それは例えお嬢様にでも申し上げられません」

トーマスは深々と頭を下げます。亜梨沙はその仕草にドキッとし

ながら、

「そ、そう」

と応じました。

有栖川邸を出た譲児は、家へと向かいます。

（考えてみたら、有栖川って、誰とも付き合っていないんだよな）

そう思いますが、親友の小次郎が血の涙を流す姿が浮かび、考えを振り払います。

「それは人としてダメな事だよな」

蘭を諦め、亜梨沙に乗り換えるのは、亜梨沙にも小次郎にも失礼だと思う譲児です。

譲児は、亜梨沙に振り向いてもらえない小次郎が、思い余って天然爆弾娘の桃之木彩乃（ももの木 あやの）に乗り換えようとした事を思い出し、苦笑いします。

「やっぱり俺は蘭さん一筋だ」

譲児が亜梨沙に乗り換えなかったのは「胸」が原因なのは内緒です。特に亜梨沙には。

その譲児の思い人の蘭は、また自分の部屋でチワワのルルを相手に特訓です。

「ルル、ほら、ご馳走よ」

高等部指定のジャージに着替えた蘭はビーフジャーキーを手に持ち、部屋の隅で唸るルルに言います。

「ルルゥ……」

蘭は泣きそうです。

（いろいろな本を読んだのに、どうしても懐いてもらえない……）

蘭は床にペタンとしゃがみ込みました。

「ねえ、ルル、どうしたらいいの、私は？」

涙で潤んだ瞳でルルを見る蘭です。クラスの誰にもそんな弱気な顔は見せた事がありません。

「うううう……」

蘭は床に両手を着き、ポロポロと涙を零しました。すると、

「クウウン……」

ルルが唸るのをやめて、蘭に近づきます。そして彼女の右手をペロペロと舐め始めました。

「え？」

蘭はびっくりしましたが、ルルが初めて近づいてくれた事に感激しました。

「ルルゥ！」

抱きしめようとしましたが、

「グルル！」

また唸り出して離れてしまうルルです。

「ああ……」

蘭は項垂れました。

亜梨沙とトーマスは譲児の見送りをすませて、邸の中に入りました。

「譲児君ね、蘭の事が好きなの」

亜梨沙が言いました。するとトーマスはびっくりしたようです。

「そうなのですか？」

亜梨沙はトーマスのそのリアクションがまたガンと心を直撃した

ので、真っ赤になりました。

（ああ、驚いた顔も素敵よ、トムゥ！）

心の中で雄叫びを上げる亜梨沙です。

「私は、てっきり、譲児様はお嬢様の事をお好きなのではないかと思っておりました」

トーマスの発言は、ギガトン級の破壊力がありました。亜梨沙は気絶しそうです。

（そ、そんな事ないわ！　高司君は、蘭が好きなのよ！）

トーマスと譲児に挟まれてイケメンパラダイスな自分を妄想してしまう亜梨沙です。

「お嬢様も、譲児様を？」

トーマスが微笑んで亜梨沙を見ました。

先程の譲児とのやり取りを見ていれば、誰でもそう思ってしまうでしょう。

亜梨沙は心臓が秘孔を突かれたように破裂するのではないかと思いました。

（違うのよ、トム！　私が好きなのは、貴方！　貴方なのォ！）

それが言えない亜梨沙です。

「あの子にドキッとしたからって、別にあなたに言い訳するつもりはないんだから！」

またしても意味不明な事を口走り、駆け出す亜梨沙です。

「申し訳ありません、お嬢様」

トーマスは深々と頭を下げました。

いつものように、通りかかったメイド五人が揃って気絶しました。

あの子にドキッとしたからって、別にあなたに言い訳するつもりはないんだから

お読みくださり、ありがとうございます。

私があなたの事を好きだと思ったら、大間違いなんだから！（前書き）

今回は次への導入部になりますので、あまりドラマはないかもです。

私があなたの事を好きだと思ったら、大間違いなんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ　ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。でも胸が小さいのを気にしています。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも言えずにいます。

ところが、親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）には見抜かれてしまいました。

でも、亜梨沙はそれに気づいていません。

舗道に植えられたイチョウの木もすっかり葉を落とし、踏み潰された銀杏のそこはかとない香りが漂う季節になりました。

今日も今日とて、ない胸を全く揺らす事なく、亜梨沙は走ります。

（昨日のトムと高司君の挟み撃ちで、おかしな夢を見て寝過ごしちゃった！）

クラスメートの高司譲児（たかつかさじょうじ）とトムに傅（かしず）かれ、女王様のような状態の夢を見てしまった亜梨沙です。

（私はトムだけ！　トムだけ好きなの！　ごめんね、高司君！）

勝手に譲児を振っている亜梨沙です。譲児もいい迷惑です。

「お嬢様、ご迷惑でなければお車でお送り致します」

早口言葉のようなトムの申し出を、

「今日はいいわ！」

と目を合わせずに断わり、赤チェックのプリーツスカートをヒラヒラさせ、ピンクのパンツをチラチラさせながら、亜梨沙は邸の庭を出たのでした。

「はあ、はあ……」

始業の予鈴まであと五分ほどです。

もう絶対に間に合わないと悟った亜梨沙は、走るのを諦めました。

「ダメだ。入学以来続けて来た無遅刻無欠席が……」

途端に力が抜け、フラフラッとしてしまいます。

「諦めるな、有栖川！」

声が聞こえました。セクハラ魔神の早乙女小次郎の声です。

「早乙女君？」

振り返ると、猪のような勢いで走って来る小次郎がいました。

「諦めるなら、また尻を揉んじゃうぞォ！」

エロ全開の顔で小次郎が叫びました。しかも両手をモミモミしています。

一歩間違えれば犯罪者です。

「何考えてるのよ！」

亜梨沙は身震いして、慌てて走り出します。

「うへへえ、有栖川ァ、尻揉ませろよォ！」

目を血走らせた小次郎が迫ります。鼻息も荒いです。

「いやあァ！」

亜梨沙は日本陸上連盟がスカウトに来るかと思うほどの速さで走ります。

恐るべし、小次郎のセクハラマジックです。

「はあ、はあ……」

こうして亜梨沙は予鈴が鳴る頃には、高等部の玄関に着いていました。

その代わりに、亜梨沙をエロ全開で追いかけていた小次郎は校門前で力尽き、あえなく遅刻です。

（あいつ、まさか、私を遅刻させないために？）

本当に少しだけですが、小次郎を見直す亜梨沙です。

マイナスからの出発ですから、今やっとスタート地点に立てた小次郎です。

（今日はいつもより余計に有栖川のパンツ見られた……）

それでも嬉しい小次郎でした。どうしようもないお下劣さです。

遅刻した事を生徒指導部の先生にこってり説教され、その上ホームルームでは最近ずっと機嫌が悪い坂野上麻莉乃先生に嫌味を言われ、小次郎は燃え尽きそうです。

「はあ……」

机に突っ伏し、大きな溜息を吐く小次郎です。

出っ歯が机に当たります。自慢のソフトモヒカンも項垂れていま

す。

それを悲しそうな目で、親友である譲児が見ています。

小次郎に声をかけに行こうにも、金髪効果で集まった女子達が取り囲んでしまい、身動きが取れないほどのモテぶりです。

「元気出せ、変態」

小次郎の項（うなじ）に冷たい缶コーヒーが押し当てられます。

「ヒヤッ！」

小次郎は洒落ではなく、そう叫んで顔を上げました。

「はい、さっきのお礼。これで貸し借りなしだぞ」

亜梨沙が缶コーヒーを買って来て、差し出したのに気づき、思わず泣きそうになる小次郎です。

それを見て、クラスの男子達が殺気立ちます。

（早乙女、許すまじ！）

特に貧乳至上主義の幾人かは本気で小次郎暗殺を考えるほどです。

（今日帰ったらネットで検索してみよう）

もしかすると、小次郎は短い人生になりそうです。

「ありがとう、有栖川。お前、本当にいい奴だな……」

弱っている小次郎のその一言は、亜梨沙のハートに響きました。

（こいつ、エロがなければ、普通に付き合えるのに）

亜梨沙は周囲の男子達の殺気など感じるはずもなく、小次郎から離れます。

「亜梨沙ちゃん、やっと仲直りしたのね。心配したわ」

天然爆弾娘の桃之木彩乃（ももののき　あやの）が涙ぐみながら言いました。

天然爆弾がいきなり炸裂です。

隣に呆れ顔の蘭がいます。

「仲直りも何も、あいつとは付き合っていないからね、彩乃。いい加減わかってよ」

亜梨沙はもう言い返すのが面倒臭いと思いましたが、一応言ってみました。

「ええ、そうなの？」

彩乃はビックリして目を見開き、蘭を見ます。

「やっとわかった、彩乃？　亜梨沙は早乙女君と付き合っていないし、私も高司君と付き合っていないのよ」

良い機会だと思ったのか、蘭は自分に対する誤解にも注釈を付けました。

「ホントなの？　じゃあ、今まで二人共、私をからかっていたのね」

今度は違う方向に逸れ始める彩乃です。しかもまた涙ぐんでいます。

「どうすればいいのよ、全く……」

亜梨沙は項垂れ、蘭は呆れ返ります。

「もう、酷いわ」

一人で妄想世界を行く彩乃です。

先日、麻莉乃先生を襲って撃沈した里見美玲（さとみ みれい）先生は、職員室へ向かっていました。

里見先生は、あれ以来、時々こうして職員室を覗きに行き、麻莉乃先生を遠くから「愛でて」いるのです。

そんな事情を知らない能天気な男の先生方は、里見先生が来るたびに一生懸命身だしなみを整えます。

哀れを催す光景です。中年男達の愚かさを感じます。

但し、麻莉乃先生命の美津瑠木新之助（みつるぎ しんのすけ）先生を除きます。

新之助先生は、先日の保健室の一件以来、里見先生が麻莉乃先生に何かをしたのではないかと鋭い推理を展開していました。

（里見先生は坂野上先生の方が男子に人気があるから、嫉妬してるんだ。だから……）

全然見当違いの推理でした。さすが麻梨乃先生信者です。

しかし、里見先生は、新之助先生が何か気づいているのではないかと警戒していました。

（あの筋肉バカ、邪魔ね。場合によっては……）

里見先生の目がギラッと光りました。新之助先生が危ないのかも知れません。

里見先生は職員室のエロ男性教師達の期待虚しく、そのまま去ってしまいました。

エロ教師達は、里見先生が入室しないで帰ってしまったので、がっかりしています。

里見先生がいなくなったのを見届けてから、麻梨乃先生は職員室を出るようにしていました。

（また何かされたら、今度こそ許さないんだけど……）

麻梨乃先生は、どうして里見先生の行いをだれにも話そうと思わなかったのか、自分でも不思議なのです。

（もしかして……？）

あるいは自分にも、里見先生と同じ感覚があるのかしら？

そんな風にも思ってしまう麻梨乃先生です。

里見先生は保健室に戻る途中で、一年生女子のヒソヒソ話を聞きつけました。

「ねえ、有栖川先輩のお邸の執事さん、イケメンよね」

里見先生はある意味ライバルであるトーマスの話をしているので、気づかれないように立ち止まって聞き入ります。

「そうねえ。でもさ、麻莉乃先生が露骨に狙っているから、絶対無理よ、私達なんか」

女子達はケラケラ笑いながら話に夢中で、まさか里見先生に聞かれているとは思っていないようです。

「それに桜小路先輩も参戦してるんでしょ？　もっと無理だわ」

「桜小路先輩って、狙った獲物は絶対に逃さないし、ライバルを蹴落とすためなら何でもするって聞いた事あるし」

里見先生はハッとします。蘭が保健室を訪れて、自分に相談した事を思い出しました。

（もしかして、桜小路さん、あの時私を！？）

里見先生は、蘭に煽られて、麻莉乃先生を拉致させられたのに気づきます。

（許さないわ。小娘のくせに……）

里見先生の目がまたギラッと光りました。今度は蘭が危ないかも知れません。

麻莉乃先生は、昨夜亜梨沙の邸で、トーマスにしな垂れかかったところを譲児に見られたので、譲児を呼びつけて何とか取り繕おうと思っていました。

（高司君はそんな事を考える子ではないと思うけど、念には念を入れるべきだわ）

警戒ＭＡＸの麻莉乃先生です。場末のスナックで飲んだくれるのは嫌なのです。

「坂野上先生」

そんな事を考えている時に、間の悪い人生を送り続けて来たと思われる新之助先生が声をかけました。

「何でしょうか、美津瑠木先生？」

麻莉乃先生は作り笑顔すら面倒臭いと思い、露骨に嫌な顔で新之助先生を見ます。

新之助先生は麻莉乃先生が怖い顔をしているので、思わず身を引いてしまいました。

「あの、実はですね……」

そう切り出した時、始業の予鈴が鳴りました。

「あ、次、行かないと。失礼します」

麻莉乃先生は教材を抱えて、新之助先生を押し退けるように職員室を出て行きました。

「あ、あの……」

麻莉乃先生の身体がほんの少し触れたので、顔を真っ赤にする新之助先生です。

（や、柔らかいんだな、麻莉乃先生……）

あまりの幸福感に裸の大将化しかける新之助先生です。

ポオッと頬を染めて宙を見つめる新之助先生を見て、他の先生方はビクッとしました。

その日の授業が終わり、亜梨沙は家路に着きました。

蘭は秘密の特訓があるので、最近亜梨沙と一緒に帰っていません。

そして、彩乃は、年末のジョニデ祭を見るために先に帰ってしまいました。

ですから、今日は一人寂しく帰る亜梨沙です。

「チャンスだよ、小次郎」

トボトボと銀杏の何とも言えない香りが漂う舗道を歩く亜梨沙を見て、譲児が言います。

小次郎は、

「いや、いいよ。俺、やっぱり諦めるわ」

といつになく弱気です。

生徒指導の先生と麻梨乃先生にいたぶられた後遺症が酷いようです。

「譲児君の言う通りよ。行きなさいよ、早乙女君」

譲児親衛隊とかした高等部の女子達が、小次郎を譲児から遠ざけようとしてそんな事を言います。

「うるせえよ、お前ら」

小次郎は騒がしい女子達に言い返しました。

「何ですって！？」

途端に獲物を横取りされた野良犬のように殺気立つ女子達ですが、

「ごめんね、そっとしておいてあげて」

譲児が言うと、

「はい！」

と返事をし、引き潮のように潔くサッと引きます。譲児は苦笑いをしました。

（蘭さんのために封印を解いたのに、違う方面に作用しちゃったなあ）

金髪碧眼信仰がここまでとは思わなかった譲児です。

結局、小次郎は亜梨沙に声をかけられないままでした。

亜梨沙は邸の門をくぐり、庭を進みます。

ドーベルマンの十二神将達がご主人様の帰宅を知り、嬉しそうに駆けて来ます。

ところが、玄関からトーマスが現れると、千切れんばかりに尾を振って、そちらに駆けて行ってしまいました。

「何なのよ、あんた達……」

十二神将の現金さに呆れる亜梨沙ですが、相手がトーマスでは仕方がないとも思いました。

「私だってトムが好きなんだもん」

ほんの小さな声で言ったつもりの亜梨沙でしたが、

「お帰りなさいませ、お嬢様」

いつの間にか目の前に来ていたトーマスに気づき、トチオトメも降参するほど赤くなりました。

（き、聞かれた？）

心臓が激しく動き出し、呼吸困難になりそうな亜梨沙です。

「如何なさいましたか、お嬢様？」

トーマスは亜梨沙の様子が妙なので、彼女の顔を覗き込むようにして尋ねました。

亜梨沙はトーマスの顔が接近したので、更に紅玉も落ち込むほど赤くなります。

「私があなたの事を好きだと思ったら、大間違いなんだから！」

また破れかぶれの事を言い放ち、玄関へと駆け去る亜梨沙です。

「申し訳ありません、お嬢様」

トーマスは深々とお辞儀をしました。

そこを通りかかったそちらの世界の警備員と庭師が卒倒しました。

私があなたの事を好きだと思ったら、大間違いなんだから！（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

あなたが誰を好きだろうと私には全然関係ないんだから！

有栖川亜梨沙（ありすがわ ありさ）は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。でも胸が小さいのを気にしています。

クラスの男子達の多くは亜梨沙と付き合いたいと密かに願っています。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼（へきがん）。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも言えずにいます。

ところが、親友の桜小路蘭（さくらこうじらん）には見抜かれてしまいました。

でも、亜梨沙はそれに気づいていません。

亜梨沙はまたイケメンパラダイスな夢を見てしまいましたが、最後にセクハラ魔神の早乙女小次郎（さおとめ こじろう）が出て来たので、

「何するのよ！？」

と叫びながら目覚めました。

（あいつ、昨日はいい奴って思ったのに）

亜梨沙の小次郎に対する評価がまた急落します。しかも夢の中の行動のせいでです。

あまりにも小次郎が哀れです。

亜梨沙は父の龍之介に行ってらっしゃいのキスを以前のように自然にしました。

「今日は痛くないキスだったな」

そんな事を言いながらも、龍之介はどんなキスでも亜梨沙がしてくれるのであれば大歓迎なのです。

「な、何よ、それ？」

亜梨沙はキスの仕方が違うのを父に気づかれたのに焦りました。

今日はトーマスが朝から出かけているので、ドキドキしなかったのです。

心なしか、メイド達やトーマスに気がある警備員と庭師は元気が

ありません。

「では、行って来る」

龍之介はリムジンに乗り込みました。

「行ってらっしゃいませ」

一同がお辞儀をして見送ります。

亜梨沙も父の見送りをすませると、鞄を肩にかけて玄関を出ました。

（トムが朝からいないのは寂しいけど、ドキドキしなくてすむから、ちょっとホッとしてる）

トーマスは私用で朝早くから外に出かけているのです。

複雑な心境で庭を出る亜梨沙です。

「おはよう、亜梨沙」

珍しく蘭と天然娘の桃之木彩乃（ももののきあやの）が門の前で待っていました。

「おはよう、蘭」

「おはよう、亜梨沙ちゃん」

「おはよう、彩乃」

挨拶をすませると、蘭が早速動きます。

「ねえ、今日はトムはいないの？」

蘭は庭の方を覗き込みながら尋ねました。

「ええ、今日は朝早くに出かけたみたいよ」

亜梨沙はそう答えながらも、

（蘭てば、『トム』なんて呼んで。急に馴れ馴れしいわね）

と思います。

「そっか。残念。ご尊顔を拝謁しようと思ったんだけど」

蘭は苦笑いして言いました。

亜梨沙は蘭の言葉にギクッとします。

（蘭、本気でトムを？　ダメよ）

トムは私が好きなんだから、狙っちゃダメ！　そう言えればどれほど楽かと思う亜梨沙です。

でもそれが言えるくらいなら、もうトムと結婚していると思う亜梨沙です。

妄想が重症化しています。

「亜梨沙ちゃんのお邸の執事さん、そんなにかっこいいの？」

トーマスにほとんど興味がない彩乃が口を挟みます。亜梨沙は学園の方へと歩き出しながら、

「大した事ないわよ。蘭も趣味が悪いわよねえ」

と言いました。

（嘘よォ、トムゥ！　蘭を諦めさせるためなんだから、許してェ！）

心の中で絶叫する亜梨沙です。

「そうよね。ジョニー様の方がずっとかっこいいわ」

蕩(とろ)けてしまいそうな目で言う彩乃です。

（何だかそれは悔しい）

私のトムはジョニデにだって圧勝しているわ！

声を大にしてそう言い切りたい亜梨沙ですが、決して言えません。

それに何度も言うようですが、トーマスは亜梨沙のものではありません。

その頃、高等部の保健室には、里見美玲先生と三年生の男子生徒がいました。

「招集かかったから来たんだけど、何？」
男子が尋ねました。里見先生はニヤリとして椅子に座って大胆に黒のストッキングを履いた脚を組み、
「ちょっと可愛がって欲しい子がいるのよ」
と蘭のスナップ写真を見せました。
「おお、一年の桜小路か。おっぱいがでかいって噂だぜ」
男子は写真を受け取って舐めるように見ます。
「そのでかいおっぱいを心ゆくまで揉みたいと思わない？」
里見先生の目がギラッと光ります。
「俺は先生の方がいいけど」
男子がふざけて里見先生の胸に手を伸ばすと、
「触ったら殺すよ！」
里見先生は鋏（はさみ）を男子に突きつけました。
「じょ、冗談だって、先生……」
男子は嫌な汗をたくさん掻いて言いました。

「私は男が嫌いなんだよ。触るのも触られるのも嫌なんだ」

里見先生の目が鋭くなり、男子を威嚇しました。

「わ、悪かったよ。で、俺はどうすればいいのさ？」

男子は後退(あとずさ)りしながら言いました。里見先生はフッと笑って、

「放課後、美術室に隠れていて。その子を私が連れて行くから、好きにすればいい」

と言い放つと、鋏をクルクルと指で回しました。

「そ、そう……」

男子は顔を引きつらせて応じました。

美津瑠(みつるぎ)木新之助(しんのすけ)先生は、坂野上麻莉乃(さかのうえまりの)先生が里見先生に何かされはしないかと警戒しています。

新之助先生は里見先生が保健室に三年の男子を連れ込むのを偶然見かけました。

（未成年を勾引(かどわ)かしているのか？）

妙な妄想を抱いた新之助先生は、保健室を見張りました。

そうとは知らない里見先生は、共謀相手の男子を保健室から送り

出します。

（まさか、まさか……）

なりは大きくても、女性と付き合った事がない新之助先生は、二人が保健室で何をしていたのか妄想し、鼻血を垂らしそうになりました。

エロいＤＶＤを見過ぎです。

（保健室は昔から危ない場所なんだ）

新之助先生は過去に何があったのでしょうか？

（後で里見先生を問い詰めてみよう）

新之助先生は朝の職員会議があるので、職員室に戻りました。

小次郎は、生徒指導の先生と麻梨乃先生からのお説教の後遺症で今日も元気がありません。

亜梨沙にセクハラをする気力がないほどです。

それなのに、

「近づかないで！」

いきなり亜梨沙に言われたので、余計落ち込んでしまいました。

（俺、今日は何もしていないのに……）

今日は何もしていなくても、今まで蓄積したものがあるのを考えようとしない小次郎です。

但し、今日の亜梨沙は、夢の中の事で怒っているので、小次郎には罪はありません。

「どうしたの、亜梨沙ちゃん？　喧嘩でもしたの？」

彩乃が小声で尋ねます。亜梨沙は席に着きながら、

「喧嘩なんかしてないわよ。あいつ、いつも私にスケベな事ばかりするからよ」

「彼じゃないのに亜梨沙ちゃんの胸やお尻を触ったりしたらダメだよね」

ようやく二人が付き合っていない事を理解してくれた彩乃は、今度は小次郎が亜梨沙のストーカーだと思い始めています。

実際、それに近いので、誤解という訳ではないですが。

でも亜梨沙は、いつもと違う小次郎に気づきました。

（どうしたんだろう？　元気ないな、あいつ）

触られないのはいいのですが、何となく寂しい気もする亜梨沙です。

「ねえ、どうしたの？　具合が悪いの？」

亜梨沙は心配になって小次郎に声をかけました。

またクラスの多くの男子が色めき立ちます。

（やはり早乙女暗殺を依頼すべきか？）

貧乳至上主義者達の何人かは、ネットで殺し屋を実際探したのですが、見つからなかったようです。

命拾いした小次郎ですが、まだ油断はできません。

「いや、別に……」

小次郎は目の前に亜梨沙の赤チェックのプリーツスカートがヒラヒラしているのに全く反応しません。

（本当に大丈夫なのか、小次郎？）

また金髪碧眼効果で女子達に囲まれてしまっている親友の高司譲（たかつかさじょう）児（うじ）は、亜梨沙のパンチラに無反応の小次郎を見て本気で心配しました。

「はい、席に着いて」

そこに麻梨乃先生が入って来ました。亜梨沙は溜息を吐いて席に戻ります。

（今日は言いがかりみたいなものだからなあ）

亜梨沙は小次郎にいきなり、

「近づかないで！」

と言ってしまった事を後悔しました。

「麻梨乃先生……」

里見先生はいつ撮影したのか、麻梨乃先生の画像を携帯の待ち受けにして眺めていました。

「愛しています……」

画像にキスして、右手がいけないところに伸びて行く里見先生です。

「美津瑠木先生！」

廊下を歩いていた新之助先生に三年生の錦織瑞穂（にしきおりみずほ）が声をかけました。

「ああ、錦織か。何だ？」

新之助先生はニコッとして言いました。瑞穂はそんな新之助先生

の仕草にすらドキッとしてしまう新之助先生マニアです。

「えと、質問があるので、いいですか？」

瑞穂は忙(せわ)しなく黒縁眼鏡を上げながら言いました。

「ああ、いいよ」

新之助先生は手からずり落ちかけた教材を持ち直して言いました。

「先生は現在お付き合いしている人はいますか？」

瑞穂はダメ元で思い切って尋ねました。

「ええ！？」

新之助先生はまさかそんな質問が来るとは思っていなかったので、仰天してしまいました。

「ええ！？」

もう一人仰天している男がいました。

瑞穂の事が好きで、瑞穂をこっそりつけているクラスメートの寺(てら)泉学(いずまなぶ)です。

学は廊下の角から二人の様子を観察していたのです。

「いやあの、それはどういう意味だ、錦織？」

新之助先生は、瑞穂に対しては全く恋愛感情は湧かないので、からかわれていると思って尋ね返しました。

「どういう意味も何も、言葉通りです」

瑞穂は真っ直ぐに新之助先生を見つめて答えました。

新之助先生は瑞穂の瞳にビクッとしました。

いくら鈍い新之助先生でも、その目が意味する事はわかりました。

（まずいぞ、これは……。教師と生徒の間で、そんな……）

どう答えればいいのかと迷う新之助先生です。

「先生？」

俯いて黙ったままの新之助先生の顔を瑞穂が覗き込みます。

新之助先生はハッとして、

「付き合っている人はいないが、付き合いたい人はいる」

と答えました。すると瑞穂は間髪入れず、

「それって、麻梨乃先生ですか？」

「え？」

わかり易いという表現が一番しっくり来るほど、新之助先生は顔

が赤くなりました。

「やっぱり……」

瑞穂は溜息を吐きました。新之助先生は焦って、

「あ、いや、違うぞ、坂野上先生じゃないぞ……」

と言いながらも、顔が破裂しそうなくらい熱くなるのを感じています。

「わかりました。先生は、胸が大きな女性が好きなんですね」

瑞穂は目に涙を浮かべてそう言うと、ダッと廊下を駆け去ってしまいました。

「おい、錦織！」

新之助先生は慌てて声をかけましたが、瑞穂はすでに姿を消していました。

（美津瑠木の奴！）

それを見ていた学は、右手の拳を握りしめました。

（いつかぶちのめす！）

彼はそう決意し、教室へ戻りました。

結局、亜梨沙は小次郎と話す機会を持てず、放課後になりました。

「あれ？」

気がつくと、小次郎がいません。

「何よ、あいつ……」

セクハラされた時はとっとと帰れと思った亜梨沙ですが、今日はいて欲しかったと思いました。

（何だか、私が酷く悪い事したみたいじゃないのよ……）

どうにも心持ちが悪い亜梨沙なのです。

「あら？」

今度は蘭の席を見ると、またいなくなっています。

（最近蘭も付き合い悪いんだよなあ。どうしたんだろう？）

蘭の秘密特訓を知らない亜梨沙は、首を傾げました。

「亜梨沙ちゃん、帰ろうよ。今日私の家で、ジョニデのＤＶＤを一緒に観ない？」

彩乃が声をかけて来ました。

「うん、いいね。行こうか」

真っ直ぐ家に帰ってもトーマスがいないので、どこかで寄り道したいと思った亜梨沙は、彩乃の誘いに乗りました。

（でも、ジョニデって、誰？）

実は全然ジョニデを知らない亜梨沙です。

一方蘭は、玄関へと廊下を急いでいました。

「桜小路さん」

それを里見先生が呼び止めました。蘭はゆっくりと振り返ります。

「何でしょうか？」

作り笑いで尋ねる蘭です。

「ちょっといいかしら？　貴女とお話ししたい人がいるのだけど？」

里見先生はフッと笑い、小首を傾げます。

（何よ、この魔女、私を誑（たぶら）かすつもり？）

蘭は里見先生が女性が好きだという事を知っています。

だからこそ、トーマスに会いに行こうとした麻梨乃先生を里見先生を利用して引き止めさせたのです。

生徒の中で一番の魔女の蘭と、教師の中で一番の魔女の里見先生が対峙する。

世にも恐ろしい光景です。

彩乃に付き合った亜梨沙は、彩乃と舗道をいつもと逆の方向に歩いています。

「彩乃の家、こっちじゃないよね？」

亜梨沙が言うと、彩乃は、

「今日はレンタルが安い日なの。ＴＯＴＡＹＡで一週間レンタルが五十円なのよ。だからジョニデのＤＶＤ全部借りようかと思って」

とウットリとした目で言います。

「全部って、どれくらい？」

亜梨沙は不安な駆られながら尋ねました。

「五十巻」

彩乃は会心の笑みで答えました。

凍りつく亜梨沙です。

（何時間かかるんだよ、それって……）

今更帰るとは言い出せず、そのままレンタルショップに行く亜梨沙です。

その時でした。

「あ」

亜梨沙はトーマスを見かけました。

今日は会えないと思っていたので、何だかとても嬉しくなります。

しかし、彩乃がいるので、嬉しそうにトーマスに駆け寄る事もできません。

いえ、彩乃がいなくても駆け寄れないでしょう。

トーマスはコーヒーショップから出て来ました。

そこは彼の母国の英国に本店があるお店です。

（あんなところで何をしていたんだろう？）

亜梨沙は気になってトーマスを観察しました。

「あ……」

亜梨沙は衝撃を受けました。

トーマスに続いて出て来たのは、金髪碧眼の美人です。
長い髪が腰の辺りまであります。
着ているのは落ち着いた色合いの紺系のスカートスーツです。
身長は蘭と同じくらいで、亜梨沙より少し大きいかも知れません。
「誰……？」
あまりの展開に彩乃が呼んでいるのも聞こえなくなっている亜梨沙です。
しかも、その直後、二人は軽めのキスを交わしました。
「嘘……」
亜梨沙は自分でも気づかないうちに涙を流していました。
「亜梨沙ちゃん、どうしたの？」
彩乃が反応のない亜梨沙に近づき、肩を揺すりました。
「ああ、ごめん、彩乃。私、用事思い出したから、帰るね」
亜梨沙はそう言うと、涙を拭って駆け出しました。
「ああ、亜梨沙ちゃん！」
意味がわからない彩乃は驚いてしまいます。

（トムにだって、恋人くらいいても不思議じゃないのに……）

亜梨沙は拭っても拭っても止めどなく溢れる涙を零しながら、枯れ葉が舞う舗道を走りました。

「あなたが誰を好きだろうと私には全然関係ないんだから！」

それでも最後は強気に決める亜梨沙です。

あなたが誰を好きだろうと私には全然関係ないんだから！（後書き）

お読みいただきありがとうございました。

嫉妬したからって、私があなたを好きって訳じゃないんだから！（前書き）

桜小路蘭のピンチです。

嫉妬したからって、私があなたを好きって訳じゃないんだから！

有栖川亜梨沙(ありすがわありさ)は大富豪である有栖川龍之介の一人娘で、高校二年生です。

ちなみに亜梨沙はそれなりに美少女です。でも胸が小さいのを気にしています。

小さいどころか、抉(えぐ)れていると思っています。

男子達の多くは亜梨沙と付き合いたいと密かに願っています。

そんな亜梨沙の邸に新しく執事が来ました。

その人の名はトーマス・バトラー。執事の本場である英国の出身です。

金髪で碧眼(へきがん)。その上イケメンで、亜梨沙は完全に一目惚れしてしまいました。

でも誰にも言えずにいます。

ところが、親友の桜小路蘭(さくらこうじらん)には見抜かれてしまいました。

でも、亜梨沙はそれに気づいていません。

蘭は、里見美玲先生の誘いに危険を感じながらも、何が待ち受け

ているのか興味が湧いたので、ついて行く事にしました。

結構冒険家気質の蘭です。

「貴女、モテるのね、桜小路さん。私、日に何度も恋愛相談を受けるんだけど、男子の思い人のほとんどが貴女よ」

前を歩く里見先生がチラッと振り返って言いました。

「そうですか」

蘭は作り笑顔で応じます。

(何を企んでいるのよ、この魔女は?)

蘭は里見先生の真意を探ろうといろいろと考えを巡らせました。

(美術室の情事の黒幕はこの人だという噂を聞いたわ。だとすると、ますます何があるのか知りたくなる)

蘭は、まさか美術室に自分を襲おうと待ち構えている三年生男子がいるとは思っていません。

その二人をジッと見ている者が二人います。

一人は美津瑠木新之助(みつるぎしんのすけ)先生。

そしてもう一人は高司譲児(たかつかさじょうじ)。

二人は互いの存在に気づく事なく別の方向から里見先生と蘭を見

ていました。

第三者が見れば、ストーカーです。特に新之助先生は。

（里見先生、何をするつもりだ？）

奇しくも同じ事を考える新之助先生と譲児です。

「あ！」

二人は、里見先生と蘭が美術室に消えたのを見ました。そして、互いにもう一人の尾行者に気づきました。

「美津瑠木先生？」

「高司？」

二人共、どうして相手がそこにいるのかは知りません。

（何だ？）

互いに相手を見る二人です。

（先生はどうでもいい。蘭さんがまさか、美術室に行くなんて……）

譲児は、美術室が別名「ラブホ」と呼ばれている事を知っています。

（蘭さんは知らないのか、それを？）

情事の中の蘭は、あくまで純情可憐です。ですから、魔女同士の対決だとは思っていません。

（取り敢えず、坂野上先生は関係ないようだな）

新之助先生はホッとしました。そして、もう一人の尾行者を見ます。

「高司、こんな時間まで何してるんだ？　早く帰れ」

譲児は新之助先生を見て、

（面倒臭い事になったな……）

と思います。本当なら、すぐにでも美術室に駆け込みたいところですが、目の前の邪魔者がそれを許さないでしょう。

「わかりました。さようなら」

譲児は新之助先生に頭を下げて、廊下を戻ります。

「気をつけてな」

新之助先生は譲児が廊下の角を曲がったのを確認してから、職員室へと戻りました。

こんな時でも間が悪い新之助先生です。

美術室では、大変な事が起ころうとしていたのですから。

廊下の角を曲がった譲児も、

「高司君、一緒に帰りましょ！」

同じクラスの女子達が同盟を結んで待ち構えていました。

（まずい……）

譲児は新之助先生がいなくなるのを見計らって、美術室に行こうと思っていたのです。

「いや、あの……」

基本的に女子に強い事を言えない譲児は、困ってしまいました。

完全に包囲されています。

（桜小路さんに譲児君を独占させないんだから！）

彼女達は「反桜小路同盟」の同志達なのです。

亜梨沙がいきなり帰ってしまったので、桃之木彩乃（ももののき あやの）はショックを受けていました。

「亜梨沙ちゃん、ジョニデがそんなに嫌いなのかしら？」

涙ぐむ彩乃です。ちょっとショックの方向性がおかしいです。

「失礼ですが、亜梨沙お嬢様のお友達の方ですか？」

彩乃は後ろから声をかけられました。

「はい？」

両手にレンタルショップのビニール袋を持ち、彩乃は無防備に振り返りました。

そこには、ジョニデも逃げ出すような笑顔のトーマスが立っていました。

必殺技（あくまで亜梨沙視点）の白い歯をキラッとさせて。

「ああ……」

ジョニデ命を返上しそうなくらい、彩乃はトーマスの笑顔にやられてしまいました。

「先程、お嬢様もいらしたと思ったのですが？」

トーマスは亜梨沙が綾乃と一緒にいたのに気づいていました。

「はい、いました……」

彩乃は顔を真っ赤にして答えました。

（亜梨沙ちゃんに悪い事言っちゃった……）

彩乃は、ジョニデの方がかっこいいと亜梨沙に言った事を後悔し

ました。

（ジョニー様のようなワイルドさはないけど、素敵……）

彩乃はジョニデ教からトーマス教への宗旨替えも考えてしまいました。

でもさすが天然爆弾娘です。トーマスの笑顔の直撃を受けても失神しません。

亜梨沙が見たら、コシの強い手打ちうどんができるくらい足を踏み鳴らして悔しがるでしょう。

「用事を思い出したから、帰るって言ってました」

彩乃はウットリして答えました。

（ああ、許してください、ジョニー様）

それでもジョニデに謝る余裕を見せる彩乃です。

「そうでしたか。ありがとうございました」

トーマスは優雅にお辞儀をして立ち去りました。

「やっぱり素敵……」

彩乃はドサッとジョニデのＤＶＤが入っているビニール袋を落として呟きました。

また一人、トーマス信者が増えるのでしょうか？

「ふぐ！」

美術室に入った蘭は、いきなり後ろから目出し帽を被って顔を隠した三年男子に襲いかかられ、右手で口を塞がれました。

「……！」

蘭は射るような目で里見先生を睨みますが、里見先生はニヤリとして、

「この間のお返しよ、桜小路さん。私を利用して、あの執事さんのところに行こうとした麻莉乃先生を引き止めさせたでしょ？　貴女も随分なワルね」

蘭はギョッとしました。

（気づかれてたの？）

「じゃあね。ゆっくり楽しんで」

里見先生はドアを開いて出て行き、外から鍵をかけてしまいました。

蘭の身体中から嫌な汗が噴き出します。

（油断した……）

力が抜けそうになりますが、何とか抵抗を試みます。

「暴れるなよ、蘭ちゃん。すぐに気持ちよくしてやるからさ」

三年男子はフッと笑い、左手で蘭の豊満な胸を撫で回します。

蘭は大声を上げようとしましたが、口に粘着テープを張られてしまいました。

「騒ぐなって！」

男子の声が怒声を帯びます。

「大人しくしてれば、痛い目を見ずにすむんだよ！」

もはや野獣のような目になっている男子は、蘭のブレザーのボタンを外し、脱がせてしまいました。

「ふぐ、ふぐ！」

蘭はイヤイヤをして抵抗しますが、力の差は歴然としており、両手を男子の右手で押さえつけられ、シルバーホワイトのブラウスのボタンも左手で毟(むし)り取られます。

蘭のふくよかな乳房を支えるピンクのブラが見えました。

「おお、噂以上に巨乳じゃん、蘭ちゃん！」

男子は狂喜して蘭の乳房を直接撫で回し、ブラをずらしました。

「ふぐー！」

蘭の目に涙が浮かびます。

（トム、助けに来て！）

こんな緊急時にもトーマスの事を思い出してしまうほど、蘭は彼に本気です。

亜梨沙が知ったら、失血死するくらい血の涙を流しそうです。

「いくら騒いだって、もうこの近くに来る奴はいないよ。観念して一緒に気持ちよくなろうぜ、蘭ちゃん」

男子はそう言うと蘭の耳たぶを舐め、剥き出しになった乳首を指で弄(いじ)りました。

「ふぐう……」

蘭はとうとう力が抜けてしまいます。男子はそれに気づいて、彼女を長机の上に押し倒しました。

「さてと。俺の方ももう準備万端でさ。前フリなしで入れるぜ」

抵抗する気力もなくなった蘭のスカートを脱がせ、パンティも剥ぎ取り、男子は自分のスラックスとトランクスも脱ぎ捨てました。傍目で見るとかなり間抜けな姿です。

「さあ、気持ちよくなろうね、蘭ちゃん」

男子は涙の痕が残る蘭の顔を撫で回してから、ゆっくりと腰を近づけました。

その時、ドンとドアに何かがぶつかる音が聞こえました。

「何だ？」

男子はギョッとして振り返ります。

蘭も涙で霞む目をそちらに向けました。

「どりゃあ！」

叫び声と共にドアを蹴破り、譲児が飛び込んで来ました。

「な！」

男子は唖然としました。蘭も驚いています。

「貴様、何してるんだ！」

譲児は蘭が一度も見た事がないような凄まじい形相で男子に詰め寄ると、右ストレートを見舞いました。

「ぐべえ！」

男子は美術室の端まで吹っ飛び、壁にぶつかってずり落ちました。

白目を剥いているので、気絶したようです。

譲児は蘭の姿を見て赤面して顔を背け、床に落ちているブレザーとスカートを蘭にかけました。

「大丈夫、蘭さん？」

譲児は顔の火照りを気にしながらも、蘭に声をかけました。

蘭はようやく自分が助かった事を理解しました。

「あ、ありがとう、譲児君……」

彼女は涙を流しました。怖かったのと嬉しいのと、いろいろと混ざった涙です。

譲児は蘭に背を向けて、

「あの、服、着ちゃって、蘭さん」

「うん」

蘭は譲児がパンティを拾えないのに気づいて苦笑します。

「どうして私がここにいるって知ってたの？」

蘭はパンティを履きながら尋ねます。

「蘭さんが里見先生と歩いているのを見かけたから」

譲児はまた顔が火照るのを感じて俯きます。

「そうなんだ。でもどうして助けてくれたの？　私、貴方に冷たくしているのに……」

蘭はブラウスのボタンを留めながら更に尋ねます。

「それでも僕は貴女の事が好きだから。貴女を守りたいから……」

譲児は顔が爆発しそうになっていました。蘭はスカートを履き終えると、

「こんな状況を利用して、私を口説くつもり？」

「いや、決してそんなつもりでは……」

蘭の指摘に譲児は慌てました。そう思われても仕方がないと感じたからです。

「もういいわよ、こっちを向いても」

蘭に言われ、譲児はゆっくりと振り返りました。すると、

「これ、お礼ね」

蘭の顔が近づいて来て、譲児の首に彼女の腕が回ります。

「え？」

呆然としているうちに蘭に身体を引き寄せられて、キスをされました。

もちろん、唇にです。

「ありがとう、譲児君。今度二人で映画でも観に行かない？」

蘭は照れ臭そうにそう言いました。譲児は夢を見ていると思ってしまいました。

「嫌なの、私と映画を観に行くの？」

蘭が少しムッとした顔で言ったので、

「わああ、そんな事ないです！　もの凄く光栄です！」

譲児が直立不動で言ったので、蘭はクスクス笑いました。

トーマスと謎の金髪美女との「密会」（あくまでも亜梨沙視点）を目撃してしまった亜梨沙は、邸の自分の部屋に駆け込むと、夕食の時間になっても出て来ませんでした。

メイド達が途方に暮れていると、父の龍之介が帰宅しました。

「亜梨沙が部屋から出て来ない？」

龍之介はまた亜梨沙の我が儘が始まったと思い、大股で彼女の部屋へと向かいました。

「亜梨沙、どうしたんだ？　今夜はお前の大好物のピザだぞ」

龍之介は猫も逃げ出す猫撫で声で言います。

「いらない！」

しかし、亜梨沙の返事は雉(きじ)が感心するほどけんもほろろな言い方です。

龍之介は肩を竦め、メイドに命じてマスターキーを持って来させました。

（こんな事をすれば亜梨沙に嫌われるかも知れない……）

一抹の不安を覚えながら、龍之介はマスターキーでドアのロックをガチャッと外しました。

「入るぞ、亜梨沙」

龍之介はドアを押しましたが、何故か開きません。

亜梨沙が椅子をつっかえ棒にしていたのです。

「亜梨沙、パパはお前の事が心配なんだよ。何があったのか、教えてくれないか？」

龍之介は困り果てた顔で言いました。

「教えない！」

またしても亜梨沙の返事は氷点下並みの冷たさです。

龍之介は心が折れそうになりましたが、可愛い娘の事を思い、何とか持ち直します。

「それとな、今日から一人、新しいメイドが入ってくれる事になったんだよ。亜梨沙専属のメイドなんだ。もうすぐこちらに来るから、顔を合わせてくれないか？」

「合わせたくない！」

亜梨沙はどこをどう探しても取りつく島のない返事をしました。

「そんな事を言わずに会ってくれないか？　トーマスの妹さんなんだよ」

龍之介のその言葉に亜梨沙はビクンとしました。

（トムの妹さん？）

コーヒーショップの前で見かけた金髪美女を思い出す亜梨沙です。

（もしかして、私ってば、何か勘違いした？）

戦隊シリーズのリーダーも謝るくらい見事に赤くなる亜梨沙です。

バッとドアに駆け寄り、つっかえ棒にしていた椅子を取り払うと、勢いよくドアを開きます。

「会うわ、パパ！」

亜梨沙は涙でグチャグチャになっていた顔を慌てて拭って言いました。

「そ、そうか……」

亜梨沙が泣いていたらしいのを知り、その理由を訊きたいと思った龍之介ですが、また亜梨沙が機嫌を損ねると困るので、何も訊きませんでした。

夕食後、亜梨沙と龍之介は、応接間のソファでトーマスとその妹の到着を待ちました。

もう時刻は午後九時です。

「どうしたんだろう？　何かあったのかな？」

龍之介はスイス製の高級腕時計を見て呟きます。その時、ドアがノックされました。

「はい」

亜梨沙が返事をします。

「遅れて申し訳ありません、トーマスです。妹を連れて参りました」

ドアの向こうでトーマスの声が言いました。

途端に胸が高鳴る亜梨沙です。

（どうしてこんなにドキドキしてしまうの？）

亜梨沙は自分の心臓の動きが理解できません。

「入りたまえ」

龍之介がスーツの襟を正して言いました。亜梨沙もスカートの裾を延ばし、姿勢を正しました。

「失礼致します」

トーマスがドアを開いて中に入って来ました。その後ろからあの時の金髪美人が恥ずかしそうな顔で入って来ます。

「ようこそ、有栖川家へ。さあ、こちらへ」

龍之介が立ち上がって言ったので、亜梨沙も慌てて立ち上がりました。

「ありがとうございます」

トーマスの妹も兄と変わらない流暢な日本語で返事をすると、兄に促されて前を歩き、亜梨沙の向かいに立ちました。その隣にトーマスが立ちます。

「亜梨沙、この人がお前の専属のメイドになるキャサリン・バトラーさんだ。キャサリン、この子が私の娘の亜梨沙です」

龍之介が紹介をすませると、キャサリンはようやく顔を上げて亜

梨沙に微笑み、

「よろしくお願い致します、お嬢様」

と挨拶をし、お辞儀をしました。亜梨沙はドキドキを抑えながら、

「こちらこそよろしくお願いします、キャサリンさん。奇麗な人で、びっくりしました」

と返しました。するとキャサリンは目を見開き、

「奇麗だなんて、とんでもないです。私なんて、お嬢様に比べれば、全然……」

俯いてしまうキャサリンです。

「そんな事ないわ、キャサリンさん。だって私、貴女があまり奇麗だから、トムの彼女かと思って……」

そこまで言いかけて、ハッとする亜梨沙です。

「キャサリンが私の彼女だと思われたのですか、お嬢様？」

トーマスがこれでもかというくらいの笑顔で言いました。

亜梨沙は口から蒸気を噴き出しそうなくらい真っ赤になりました。

「嫉妬したからって、私があなたを好きって訳じゃないんだから！」

亜梨沙は苦し紛れにそう言うと、唖然とする龍之介を尻目に応接

間を飛び出してしまいました。

「ありがとうございます、お嬢様」

トーマスは恭しくお辞儀をしました。

その言葉が微妙に変化しているのを聞き逃した亜梨沙です。

嫉妬したからって、私があなたを好きって訳じゃないんだから！（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0452x/

ごめんあそばせ召しませ執事？

2011年12月24日10時52分発行